

## 第10回 蘇東坡が都を好まなかったいくつかの事情

——愈いよいよ叩いよけば愈いよいよ無窮びん、敏せいにして静せいなり

2017年6月27日（火）。

「なんか年寄りのセリフみたいだけどさあ、時間が経つのはやくない？ だって、叔父さんから、トバー君の『遊たびの奇絶きせつ』を聞き出すという使命を授かって、これでもう1年なんだよなあ。あつという間だよね」

「ふむふむ。いまのイノ君のお言葉であります、早速ながら、3点ほど突っ込みを入れてもいいでしょうか？ 第一点は、時間が経つのははやいっていつとき『はやい』は、漢字で書くと、『速い』か『早い』か、そのどちらでしょう？」

「突っ込みって、国語のクイズ？ 小学生の正答率は60パーセントみたいなの……。あんまし考えたことないけど、ボクのイメージだと、時間がびゅんびゅん飛んで行く感じだから、『速い』のほうかな」

「そう？ でも、1年が過ぎて、『あれっ、もう』って思うわけですよ。時間がびゅんびゅん飛ぶのを横から見て、『速いなあ』と感じているのではないのですよね。つまり、1年という時間の経過が、それが本来あるべき感覚よりも短いと感じるのですから、早朝というのと同様に、『早い』と書くのが適切なのではないでしょうか」

「そうなの？ いまの説明、よくわかんないです。林先生ならもつとつまく解説してくれたりするかもね。なんかはつきりしないから、ひらがなでいいじゃん。漢字を使って話しちやいないんだし」

「突っ込みの2点目は、どうして年寄りみたいなのでしょう？ イノ君流の解釈に準拠すると、年寄りとは時間がびゅんびゅん飛ぶ速さに敏感なのでしょうか？ たぶんそうではなくて、ある一定の時間が経過したことに對する感覚に、加齢とともにずれが生じて、まだ夜中だと思っていたら、『えっ、もう朝？』みたいなことになるのではないのでしょうか。その意味でも『早い』なのではないのでしょうか」

「漢字の書き分けは、やっぱりまだストーンとこないけど、子どものころの1年って、ものすごく長かったけど、だんだん短くなってくるんで、感覚のずれっていうのはわかるかも。どうしてそうなるのかなあ？」

「たぶん、記憶のメカニズムと、生活の単調化に由来するのではないのでしょうか。子どものころは、1年の間にたくさん新しいことを経験し、たくさんのが新たに記憶され、脳がたくさん発達するので、充実感があって時間が長く感じら

れるのでしよう。それに対して、年を取ると新たに経験することが少なくなり、1年経つても脳にはさほど充足感がなく、発達するどころか逆に衰えたりもするので、時間が短く感じられるのではないでしょう。しかし、脳としては、原因が自分にあるとは認めたくないのです、時間のせいにしておこうということではないでしょうか」

「つまり、責任転嫁ってこと？ 脳つてずるがしこくない？ そんで、脳の充足感つて、どういふところからくるのかなあ？ 刺激を受けて、科学的にいうと、脳にいっぱい血液が送られ、酸素やら栄養分やらがばんばん消費され、脳がいっぱい働いたなあつてことかな。ことによると、浩然こうぜんのき気が脳の中をぐるぐる渦巻いて、もわもわつとなつて、ぼわつと吹き出すつてことだったりする？」

「いま『浩然の気』って言いましたか？ そんな言葉をイノ君は知っていたので

すか？」

「昨日トバー君から聞いたばかりなんで、ちよつと使ってみただ。ここに録音されてるよ」

「年寄りになると、気の抜けたビールみたいに、浩然の気が出切ってしまうのかもしれないですね」

「で、突っ込み3点目は？」

「その録音です。録音してくるようイノ君に使命を授けたりしていないと思いませんけど。むしろイノ君から出た話ではなかったですか？」

「漢文ぎらいのボクが言い出すはずないじゃん。叔父さんのために、この1年間奮闘努力してきたと、うんとほめてもらいたいなあ」

「ほめてもらいたいのはこちらですよ。イノ君が次々に持ってくる音声データ」

からせつせと文字起こしをして、整理して、ホームページにアップして、この1年間というものは、ずっとその作業ばかりです。こっちだって、ほかに書きたいものだってあるのに、完全に全部ストップですよ」

「なんか迷惑そうじゃん。逆ギレ？」

「だれが何を言い出してどのように事が始まったのか、私のチャチャなホームページに経緯がちゃんと記録されていますから、明々白々です。どっかの獣医学部みたいに、あつたはずの文書がなかったものにされたりってことは金輪際ありません」

「記録があるからといって、その字面を見ただけでは真相はわかんないよ。ボクは叔父さんの思いをソントクして、トバー君の話をチャチャなホームページに載せてみたらどうかっていつてみたんで、事実上は叔父さんの指示なんだよなあ。」

つまり、ボクの本来の意思はゆがめられちゃったってこと」

「1年前に、そんたく 忖度なんていう言葉を、イノ君は知ってましたかねえ？ 世の中の

話題はまだ前のあのせこい都知事だったですよ。それが誰だったのか、世間はずう忘れてしまっているでしょうけれど」

「要するに、マジで1年が経つのがはやいってことだよ。この『はやい』はゼツタイに『速い』だけだよ。1年の間に共謀罪なんてえのもできちゃったしさ。

だから、やばいんじゃないスカ？ ボクとか叔父さんとかトバー君とか、政権批判みたいなことをくっちゃべってんのが、チャチなホームページに厳然たる証拠として残されているのは。叔父さんとしては、共謀罪でしょっぴかれたら、抵抗する文化人のはしくれみたいになれてうれいのかも申しないけど、トバー君は気の毒だね。大昔にも流罪になって、いまもまた牢に入れられたりしたら、

さすがにひどすぎるもの」

「900年以上も昔に死んだ人をどうやって捕まえるんですかねえ」

「あつたものをなかったことにできる政府なんだから、死んだ人を生きてることにするのだって簡単なんじゃないの」

「もし捕まったら、事はイノ君から始まったと、わたしは断固証言して、トーバ―君を弁護します」

「だれが見たって、いちばんうさんくさいのは叔父さんなんだけどなあ」

「そもそもの経緯はともあれ、ホームページにはこれまでに9回アップして、手間はかかりますけど、楽しいことは楽しいかなと思っています。閲覧数はあいかわらずでも、ホームページへの絶大な貢献に対し、お中元でも用意しましょうか？暮れには貴重なサイコロキャラメルをお歳暮にいただいたことでもありますし」



「だったら、そうだなあ、ボクはカールとかかな。西日本ではまだ作るらしいけど、こつちではもう買えなくなるから。叔父さんたちの世代にとってなつかしいお菓子が次々に消えていくんで、さびしい？」

「これも時代の流れですかねえ。なかには『ぼんぼこだぬきのおまんじゅう』みたいに名前を変えて復活したのもあるみたいですけど。そういえば、この前、東京の人形町で人形焼を買ったら、これは昔と変わらなかったです。人形焼というと浅草の仲見世で焼いているのがよく知られていますけど、浅草のは皮が厚くて餡が少ないんですよ。人形町のは餡がたっぷり、あれがホントの人形焼です。100年の歴史があるのですから」

「それっていつ買ったの？ ボクにくれなかったじゃん！ 9個食べたらトーバ——君の時代に飛んで行けたのに」

「どういうこと？」

「100年かける9で900年。単純な計算だよ。カールは1968年発売っていうから、18個ってことだね。そういうことで、よろしく！」

\* \* \*

① **こ** のように言い出しますと、今日はずっとテレビを見ていたでしょうってこ

とになってしまいますが、最後の言葉は「愛してる」だったと、記者会見で市川海老蔵いちかわえびぞうさんが明かした場面が繰り返し流されるのを見て、では私たちの場合はどうだったのかと、ついつい考え込んでしまいました。もう900年以上も前のことで、すから記憶が薄れてと言うのは、つまらない言い訳でしかなく、海老蔵さんのようにきちんと向き合う姿勢に欠落していたという事実に対してさえも、たぶんわ

ずかな反省しかなかったのです。

——ん？ いきなり深い溜め息なんかついて。「私たちの場合」って、もしかして、奥さんが亡くなったときのこと？ それっていつ？

Ⓣ 今回お話すると予告したのは、鳳翔ほうしょうでの任を終えてからのことです。妻の死

は、都に帰って間もないときでした。昨夜からずっと報道されているように、小林こばやし麻央まおさんは34歳で亡くなり、海老蔵えぞ蔵さんは39歳です。私たちの場合は、私が30歳、妻が27歳でした。

——ああ、そんなに若かったんだ。いまのボクより下じゃん。それじゃあつらか

ったろうと思うけど、きちんと向き合う姿勢がなかったってどういうこと？ 突然亡くなって、ぼーっとしてしまったってこと？ それとも、忙しくて悲しむ間もなかったってこと？ もっと非人情に、そもそもあまり心に感じる事がなかった？

① 海老蔵さんの場合は、病気と知れてから時間とともに覚悟のようなものが出て行ったのでしょうけれど、私は何もわかっていませんでした。鳳翔を発ったのが治平元（1064）年12月の終わり、都に着いたのが翌年の2月、そして、妻が亡くなったのが5月28日でした。その間に妻の異変に気付くことはなく、何かがありそうだとの予感もありませんでした。都での生活が始まったばかりで、新たに身に降りかかって来ることに対処して行く流れの中で、私にとっては突然

であった妻の死をきちんと受け止めることもないままに、なんとなくやり過ぎてしまったのでした。

——奥さんはどうして亡くなったの？

㊦ いまなら、あるいは麻央さんと同様であったとか診断がついたりするでしょうか。前回お話したように、妻の兄が鳳翔に來たのは妻が呼んだからで、それはたぶん死に向けての準備だったのでしょう。そのことは後になってからわかったので、次回くらいにお話したいと思います。

——えっ、もう次回予告？ 今日はこちらでおしまい！ まさかねえ。まだお通し

だけで、何も焼いてないよ。

海老蔵さんの記者会見を見て、自分はひどかったと、話す気が萎えてしまった？  
 いまだってあんな夫婦はあんまいないから、一日中テレビで流すくらいに注目されるってことなんで、あんましがっかりしないでいいと思うよ。トバー君は大昔の封建男子なんだから、奥さんを亡くして泣いたりしたら、「なんだ、みつともない」ってことだったりしたんじゃないの？

① 昔でも妻の死を深く悲しみ、詩に詠んだりした人もたくさんいました。例えば、先輩の梅堯臣ばいぎょうしんが愛妻家であったことは以前にお話した通りで、**第6回**、このような詩がありました。

もとより人生には長い短いがあり、

我が妻の生涯は37歳までであると、

天が定めた理由を問いただそうとは思わない。

世間の妻というものをたとえ全て見尽したところで、

我が妻ほどに美しく賢い女性はいないだろう。

もしも愚かな者は長生きをすることがあるのなら、

その分の寿命をどうして貸してくれなかったのだろうか。

幾つもの町よりも価値のある宝物が、

かの世に沈んで埋もれてしまったのを、

ただ忍んで堪えるしかないとは、

いったいどういふことなのか。

——こんどは37歳。やっぱ、昔は寿命が短かったんだね。ボクももうそろそろだつたりするのかな。美しく賢いから……。

でも、自分の妻より美しく賢い女性はいないって言い切っちゃうのって、なんかすごいかも。詩だから、おおげさに表現してみせたってことなんだろうけど。

㊦ 普段から齒の浮くようなことを平気で言えてしまう人なら、言葉だけで真実味が無いということになるでしょうけれど、梅堯臣はまことに実直な人でありましたから、本気でこの言葉通りに思っていたのでしょう。

私は梅堯臣のように詩を詠むことをしませんでした。そして、麻央さんの「愛してる」に相当するような言葉があったのかというと、妻がそれを言い残し、私



が受け止めるというような状況さえありませんでした。ある日突然に妻がいなくなり、それが新たな現実となったのです。

——よくわかんないけど、忙しくて悲嘆にくれてるヒマがないっていうのなら、それはそれで悪くはないんじゃないの。どっちみち、新たな現実に適応しなくちゃいけないわけだし。

Ⓣ 思い返して、何かなかったらどうかとあえて捜すと、鳳翔を旅立つ朝に、何気なく言ったままでと、さほど気にもとめなかったことがあります。

妻はこのように言いました。

「今朝のあなたさまは、まるで少年のように浮かれていらっしやいます。あなた

さまは、きっとそういうお方なのでしょう。子供だから、時にやんちゃもなさいましよう。もつともつと大目に見てさしあげませんといけませんですね」

その朝は、確かに浮かれていたのでしょう。3年間の役人暮らしを終え、解放感でいっぱいだったのです。「やんちゃ」とは、鳳翔であったいろいろなこと、とりわけ全財産をはたいて4枚の菩薩像を持ち帰ることになったことを指すのだらうと思い、

「私としては、鳳翔を去るまでの間に、少しくらいは大人になったのではないかと思っていた。しかし、子供だと認めてくれるのなら、それに乗じて何をしでかさかわからんが、それでもいいのかい」

「結構でございます。いたいけな子供のやんちゃが人を楽しませますように、あなたさまには人の心を温かくさせるようなところあるのではないでしょうか。そ

れを冷ましてしまっただけはないと思うのです」

——ふーん。トバー君はやんちゃ坊主なのかあ。

ここでボクとしては、いつものようにジョン・クレアを持ち出しておこうかなって思ったりなんかしたんだけど……。かなり場違いかもわかんないけど、ジョン・クレアといえばメアリーだよ。メアリーとジョン・クレアは死別したわけではなく、むりやり仲を引き裂かれたんだけど。

破局からしばらく経って、ジョン・クレアはこんな詩を詠んでいるんだ。

私たちはいつも、別れることがどんなに嫌で、

会うことがどんなに嬉しかったことか。

日が沈むころ、なんとという熱心な足取りで、

あなたのところへと私は急いだことか。

春には、いや、冬の日の天気できえ、

私たちが再び会うまでに九日が経つことはなかった。

だが今では九年の太陽が昇り、沈んだ、

私たちが一緒にいるのを一度も見出すことなく。

(鈴木蓮二訳 127ページ)

詩の一部分だけの引用だけど、こんだけでも、ボクらしくないけど、ちょっと胸がきゅつとなったりしない？

ジョン・クレアがメアリー・ジョイスと出会ったのは十代半ば。メアリーの家

族の反対で2人の関係が終わったのは23歳のころ。フツーに会っていられたのが、実はいかに特別なことであったのかと、9年経ってしみじみ思ったという詩だけど、ジョン・クレアって人は、ある意味でメチャクチャにしつこくて、生涯メアリーのことを理想の女性と思い続けて、繰り返し詩に詠むんだ。もし若くして別れていなかったら、そこまで理想化することはなかっただろうなあって思ったりするのは、ちよつと皮肉な見方だったりするかな。

㊦ 梅堯臣の例もありますから、ジョン・クレアがメアリーと結婚していたら、それはそれでまた別の愛の詩を詠んでいた可能性は大いにあるでしょう。

海老蔵さんは「どのような奥さんだったのか」と問われて、「自分を変えた奥さんなんじゃないでしょうか」と答えました。思えば、それについては私達の場合

もほぼ同じで、妻がいなければ鳳翔での日々はかなり違って、従ってその後の人生も大きく異なっていたでしょう。

——ジョン・クレアは、もしもメアリーがいなかったら、その詩の半分は生まれなかったと思うな。

① それでは、鳳翔を後にして都に向かったところから、順序よく今夜の話を変更して始めたいと思います。出発の朝は、妻から指摘された通り、本当に浮き立つばかりの心持ちでありました。本来私には向いているとは思えない役人暮らしが一段落し、都に帰れば弟に会えるのです。心が弾むのはわかっていただけですよ  
ね。

——3年つていうと、中学とか高校とか同じで、区切りとしてちようどいいくらいなのかもね。都への旅はいわば卒業旅行のようなものだったのかな。

㊦ 都への道中をできるだけ楽しもうと、卒業後の先のことはさほど考えていませんでした。弟は父を一人にはできないという理由で官職に就くのを辞退していましたから、弟にもしもよい仕事がまわってくるのなら、今度は私が父のもとに残って弟を送り出すことになるだろうかということくらいをぼんやり思っていました。

——一つが終わって、次がまだ決まっていない隙間の時間っていいのかも。トー

バー君の場合はお役人になって、食いつぶされる心配はなかったわけだから、とくに気楽だよ。ボクなんかは大学を出てから、一つの仕事が3年を超えたってことがまだなくて、少しも望んでいないのに、ヘンな困った隙間だらけだったんだよなあ。一度就職したら定年まで隙間なしっていうのも、それはそれでつらかったりするのかもしれないけど、ボクみたいなものもあましようれしいもんじゃな  
いよ。

最初の仕事だけは自分から辞めたのではなくて、あの会社が店じまいしなければ、3年どころじゃなくてもっと長く続いたはずなんだ。小さな出版社の社長さんが叔父さんの知り合いで、結構よくしてくれたんだ。あの仕事だけはよかったですって思っている。

あと少して、いまの介護の仕事が一番長いってことになりそうだなあ。安定し



の方がいいんだけど、長くなるのって、なんかつまないっていうか、息苦しい感じがあったりするかも。3年ぐらいで区切って、卒業旅行みたいなのがあったら、気分が变ってきつといいんだろなあ。そんな甘い考えはゼツタイ許されないけどね。

㊦ 旅はまずは長安ちやうあんを目指し、そこで新しい年を迎えました。唐の時代には都であつた長安も、宋の時代には地方の町としてせいぜい中くらいの規模で、鳳翔の方が経済的にも政治的にもずつと大きな都会でした。それでもさすがに文化遺産は

たくさんあり、例えば陳漢卿ちんかんけいの家で呉道玄ごどうげんの画を、安師文あんしぶんの家で顔真卿がんしんけいの書を見せていただくなど、所蔵家をあちこち訪ね歩きました。いまなら博物館や美術館でまとまって見られるわけですが、当時は士大夫しだいふ仲間のネットワークを使っ

て、誰が何を持ってきているのかという情報を得て、知人を1人か2人介すること、  
貴重な所蔵品を見せてもらったのでした。

いままたまた2人の所蔵家の名を出しましたが、それは気に留めていただく必  
要はありません。呉道玄はまさに私が買った菩薩像を描いた人で、顔真卿につい  
ては前にお話したでしょうか。


——さあ、どうだったかなあ。克明にノートをとって聞いているわけでもないか  
らなあ。さつきいったボクの最初の仕事は零細出版社の社長のアシスタントだっ  
ただけ、自費出版で自伝を出すのを手伝うなんていうのもあって、話を聞いて  
ボクが原稿のものになるものを作ったりもしたんだけど、録音に頼らずに、き  
ちんとメモをとれて、よく社長に注意されたなあ。それなのに、いまでもボイス

レコーダーのスイッチを押したら、一切メモとかしなくて、聞いた先からアルコールとともに分解させてしまっているんだから、ひどいよね。

㊦ 顔真卿は唐代一の書家とされています。書が立派なだけではなく、その生き方も立派でした。

何度も話に出て来ている安祿山あんろくざんの反乱のとき、都を目指して進攻する反乱軍の前に抵抗する者はほとんどいませんでした。人々は平和に馴れて戦い方を知らず、当時最強の安祿山の軍団の前に震え上がってしまったのです。立ち上がった数少ない人々の中に、顔真卿とその一族の顔杲卿がんこうけいがいました。2人は別々の土地で反乱軍に挑み、その勇気ある行動がなかったならば、安祿山の前に全てがひれ伏し、唐朝は終わっていたのかも知れません。

残念なことに、2人とも悲劇的な最期を遂げねばなりませんでした。顔杲卿は戦いに敗れ、安祿山のもとに連れて行かれ、安祿山に対して激烈な言葉を投げつけました。安祿山は激怒し、顔杲卿は殺されたあげくに舌を切り取られてしまいました。顔真卿は生き延び、再生した唐朝に仕えたのはよかったです、その後各地に跋扈するようになった軍閥の首領の、とりわけたちの悪い者を説得して朝廷に帰順させるための特使として派遣されました。顔真卿が特使に選ばれたのは、その存在を煙たく感じる朝廷の大物が、あわよくば亡き者にしようと思んだため、その思惑通り、顔真卿は軍閥の首領に殺されてしまいました。

前に、スーパースターの富弼ふひつが、戦争を回避するために遼国りょうこくに派遣されたことをお話しました。 **第3回**。そのときの経緯が顔真卿と非常に似通っていたので、スーパースターの欧陽脩おうようしゅうは、富弼を顔真卿にしてはならないと、その派遣に強く

反対しました。富弼は時の宰相にはなはだ嫌われていたのです。富弼は死を覚悟して遼国に行き、宰相に妨害されながらも和平交渉をまとめあげたのでした。

顔真卿の書は、自身の生き方そのままに剛健かつ勇壮で、見るものを肅然とさせるものがありました。ところが、長安の安師文の家で私が見たのは、かなり印象が異なっていました。さらりと書き流したような手紙で、見ているうちに何かしらほのぼのとしたような気持ち湧いて来ました。海老蔵さんをたとえに持ち出すなら、すっかり隈取をして大きく見得を切った顔だけを見ていたのが、何も飾らず力んだところのない素颜に初めて触れて、心がなごんだようになったと言ったらよろしいでしょうか。

——なんとなく想像できたりするかなあ。ボクは、学校で仕方なく習字をやらさ

れたことがあっただけで、書について語ってもらってもセンゼンわからないんで。

よくさあ、やっぱ手紙は手書きのほうが気持ち伝わるみたいなのをいうけど、そういうのもわかんないんだよなあ。ぶっちゃけ、要するに読めるように書いてあればいいってことだったりしない？ 達筆で読めないなんて、バカみたいじゃない？

そんなことをいうボクが聞き役ではとっても悪いような気がするなあ。トーバ―君としては、たとえ話を持ち出して、一生懸命に説明してくれて、ホント、申し訳ないなあ。

㊦ あなたにわかってもらえるようでなかったら、私の話は、漢文オタクの仲間内だけで通用する自慢話になってしまふことでしょう。

顔真卿の手紙を見て、顔真卿にもこのような一面があったのかと新鮮な驚きがあり、しばらく見ているうちに、「瓦注<sup>がちゅう</sup>」という語が私の頭に浮かんで来ました。子どものころ、サイコロで勝ち負けを争うようなときに、瓦を砕いた破片を賭けたりしました。それが瓦注です。大人は賭博に黄金を賭けますが、瓦注はほぼ無価値なので、純粹な遊びの世界の中に行うことができます。顔真卿の手紙の文字は、瓦注で遊んでいる子供のような趣があつたのです。

——ボクなりに想像するに、何千万円の価値があるとかわれる画よりも、そこらの小学生が描いた画のほうが、なんかよかったりするってことがあつたりもするから、もしかしてそういうことかな？

① 前回、弟に向かって、書の本質がわかったような口ぶりの詩を詠んで送ったことをお話ししました。顔真卿の手紙を見て、まだまだ理解が浅いと思い知りました。暫定的な結論として、書とは人そのものということなのではないでしょうか。瓦注を賭けて夢中で遊ぶ子供の姿こそが、人本来のものであったりしないでしょうか。顔真卿ほどの人であって、いざ筆を持って書こうとすると、黄金を賭ける大人のように力んでしまつて、本来のものが覆い隠されたりすることがあるのではないでしょうか。

——子どもが遊ぶ姿ってというのは、奥さんが「やんちゃ」っていつてたのと通じたりする？ トーバー君としてはそういうものが書けたの？



㊦ 書に限らず、画や詩も、こうありたいものだと考えて、その通りにできたと

自分で思ったなら、その時点で一切が駄目になってしまふのではないのでしょうか。

再びあまり適切なたとえではないのかも知れませんが、カラオケで歌うのにいくらか似ていたりしないでしょうか。書や詩は士大夫同士の交際に欠かせませんでした。宴席で詩を詠み合ったり、筆を走らせたりするのはごく日常的なことでした。カラオケでマイクを握って、あまりに力んで歌われると聞いている方はいささか引いてしまうでしょうし、「俺はうまいだろう。どうだ！」といった感じが露わだったりすると、いくら上手でも、聞いている方は感じが悪くて楽しめません。瓦注を賭けて遊ぶ子供のようには、何の構えもないのが一番愉快に楽しめるのではないのでしょうか。

——でも、子どもが歌うのが一番いいのかというと、そうではなくて、やっぱプロの歌手は違うんだよなあ。むずかしいね。

㊦ 長安で、石蒼舒せきそうじゆという有名な書家を訪ねた折に、カラオケのマイクを渡されるように、「何か書を一つ」と所望されました。瓦注で遊ぶようにと意識はしても、書の大家を前にして、ここは一ついいところを見せたいと、心のどこかで思ってしまうのが人情というものでしょう。そのような下卑た思いが湧いてしまうのが人間の困るところです。

——そうだよ、そこなんだよなあ、だから、AI（人工知能）はずるいつて思うんだ。だって、やつらには邪念とか心の乱れとかってというのがゼンゼンないんだ

もの。将棋も碁も、ここ2、3年で人間はAIにまるつきり適わなくなってしまうけど、それはもうしょうがないんだよ。平常心が大切とかよくいうけど、AIは最初から最後まで平常心しかないんだもの。そこんところすでに人間は負けてるね。人間は勝負の最中だって、脳のたぶん9割くらいは生き物として生存するための邪念みたいなものに使ってんじゃないかと思うよ。AIの方だって、いつ電源を切られるかわからないみたいない心配事に常に乱されるようにしておかなかったら、平等な勝負ではないと思うんだけど。

㊦ 石蒼舒は私の心の乱れを見て取ったのでしよう、正面に座を占めていたので書きにくかろうと、すっと立ち上がって姿を隠してくださいました。私は、目の前の紙に心を集中させようと思いました。筆を持った指先に徐々に気持ちこぼり、

頃はよしと、いざ書こうとしました。ところが、どうしたことか、筆はぴくりとも動きませんでした。金縛りにあつたように、腕に力を入れても、筆を動かすことができないのです。おかしなことだと、視線を紙から筆へと移すと、筆の根元を掴んでいる3本の指が目に入りました。なんと、石蒼舒が私の真後ろに立って、筆を掴んでいたのです。

——ん？ 後ろに立っていたって、どういうこと？ それって、あれみたいだったりする？ ほら、将棋界のレジェンド、いわゆる「ひふみん」のあれ？ トーバー君も知ってんよね。ここんところ中学生の藤井くんの活躍もあつて、「ひふみん」もしよつちゆうテレビに出てるけど、「ひふみん」は勝負のさなかに、相手の後ろ側に回って、じいっと将棋盤を見たりすることがあるんだってね。業界用語

で「ひふみんアイ」っていうんだけど、トバー君もそんなふうにされたの？

㊦ 石蒼舒は、年齢では加藤九段には及びませんが、でっぷりとした体形はほぼそっくりで、にっと笑った感じも似ていました。

「わたくしは、まあ、どういふことかと言いますと、ちよつと驚きました、はい。

理論的に言つて、たぶん、王猷之おうけんしもかようであつたかと思うのです、はい」

——いまのは、もしかして「ひふみん」の真似のつもり？ 似てないけど。

㊦ いえ、石蒼舒がたまたまこんな感じだったというだけです。

満面の笑みで立っているその石蒼舒に向かつて、私はこう言いました。

「近ごろは弓を引くせいで、腕の力もいくらかついたと思っていました。先生の3本の指に抑えられ、このように少しも動かすことができません。筆を持っては、私などは5歳の王献之に遠く及ばないのでございます」

「わたくしは、天下一の力持ちが、すなわち天下一の書家であるとの説は取りません。それでも、やはり力というものではなくてはならないとの思いはあるのです。それは心の力というようなものですけれど、はい。それが十二分に籠った名品であれば、100年後も、1000年後も、人を感動させると確信しております、はい」

——えーと、なんか話が見えないんだけど、どういうこと？

㊦ 王猷之という人にまつわる非常に有名なエピソードを下敷きにして、2人で戯れ半分<sup>おんごし</sup>に交わした問答なので、少し説明がいりますですね。

王羲之の名は聞いたことがありますか。書聖といわれ、中国第一の書家とされています。

——えーと、世界史の教科書にあつたかも。羲の字が難しかったのを覚えてる。たしか、画家の顧愷之<sup>こがいし</sup>、書家の王羲之<sup>し</sup>って、ペアで暗記したんだよなあ。

㊦ 顧愷之の名が出て来るとは大したものです。中国史上有名な画家を2人挙げよと言われたら顧愷之と呉道玄、有名な書家を2人なら王羲之と顔真卿になるでしょうか。もちろん、別の名を挙げる人もいるでしょうけれど、王羲之だけは絶

対不動です。

王羲之は大貴族の謝安しゃあんの20年ほど先輩で、やはり大貴族でありました。その書は生前から評価が高く、死後はますます高まり、唐の太宗皇帝たいそうはその権力をもつて集められる限りの王羲之の書を己の手に置こうとし、それを酷愛するあまり、自分の墓に納めさせました。そのために、王羲之の真筆はほぼ地上から消え去り、いまに伝わるのは模写したものだけです。

その王羲之の子が王献之です。王献之が5、6歳のころに字の練習していますと、それこそ「ひふみんアイ」で背後から父の王羲之が見ている、何を思ったか、父は息子の筆を指でつまんで引っ張り上げようと思いました。ところが、息子が筆を握る力が存外強くて、父は動かすことができませんでした。

そのときに、



「この子はきつと書をもって世に名を知られるようになるだろう」

と言ったと伝えられ、実際に王献之は父には及ばないものの、書家として立派な名を残したのでした。

——筆を握る力が大事なの？ だったら、習字の時間はまず筋トレから始めるといいよね。

① このエピソードは「子を知ること、父に如くはなし」の一例とされるわけですが、王羲之は、息子の腕の力そのものではなくて、心の力を測ったというのが石蒼舒の解釈でした。背後から見ても、まだ小児でありながら、一点一画に力のあらん限りを注ぎ、精妙な心を用いているのを知って、必ず大成すると考えた

というわけです。

それで、私は石蒼舒に、

「では、心の力はどのようにしたら鍛えることができるのでしょうか」  
と、尋ねました。

「わたくしは、それは恐らく、孟子の言うところの浩然の気を養うことであろう  
と思います。決して鰻を食べれば力がつくという単純なことではないのでありま  
す、はい」

——だから、ヘンに「ひふみん」っぽくしなくていいから。ウナギっていうのは  
どうせウソだってわかるけど。

それで、その「浩然の気」とかいうのはなんなの？ それをどう養うと心の力

がつくの？ ボクもできたりする？

㊦ あなたはすでにもうなさっています。サーフィンの前にやっている準備体操のあの呼吸法は、すなわち浩然の気を養うことに通じています

少し説明しますと、気をどのように養えば、肉体、精神ともに最もよい状態を保てるのか、私は、その要の一つは体の内と外とで気を往き来させる呼吸法にあると考え、試行錯誤を積み重ねた末に、60歳の頃に一つの方法にたどりつきました。あなたにお教えたのは、浜辺で簡単にできるようごく簡略化したものです。それは何も私の独創ということではなく、道教には「胎息たいそく」<sup>たいそく</sup>と言う独特の呼吸法があり、それを学びつつ、実践を重ねて工夫したのです。

——へーえ、ただなんとなくリラックスできて、波に乗る前から波と一体化できるような気分になれて、ちよつといいかなくらいにしか思っていなかったけど、実は奥深いものだったんだね。でも、なんにも知らなかったから、なんかが養われたような気はしないし、心の力がついた気もしないんだけど。

① 理屈で理解するより、実際に続けることで自然と養われて行くものがあることの方が大事だと思います。きつと効果があったのではないでしょうか。

——サーフィンをすることで自分が変わったとの自覚はすぐくあるけど、呼吸法がそこに関係しているとはあんまし思わなかったなあ。そこで、簡略化しない呼吸法ってどんな感じなの？ むずかしい？

㊦ 今日は話がそこに及ぶとは思っていませんでしたが、流れのついでで、ざつと説明してみましようか。

浜辺では海に向かって座っていたのですが、夜寝る前に、東ないし南に向かつて座って下さい。方角にはそれなりの理由はあるのですが、実践的にはどの向きでもよろしいでしょう。座り方は、正座でも胡坐でもいいでしょう。ベッドの腰掛けるのでもいいです。バスタオルのようなものを頭からかぶって、気持ちを集中しやすくさせてもいいと思います。

最初に、手のひらで軽く顔のまわりをポンポン36回叩きます。次に、こぶしで腹や腰のまわりをやはり36回叩きます。顔よりはやや強い感じですが。36回という数にもそれなりの意味がありますけれど、適当な回数で結構です。

そして、肺、胃、腎臓、肝臓、小腸、大腸と、内臓の一つ一つに意識を向けて下さい。どこに腎臓があるのかわからないかも知れませんが、それでも意識するのはとても大事なことです。

それから、大きな光を思い浮かべて下さい。燃え盛る炎でもいいでしょう。それが腹の下方、丹田たんでんに入ると想像して下さい。丹田とは、気を養う上で極めて重要な場所として考えられていたものです。人間の体を解剖してもそのようなものは実体としては存在していません。自分の体のいわば原初的な中心点だと思つて下さい。大きな光とは、あるいは宇宙の始まりのビッグバンだと思つていただいてもよろしいでしょう。ここでのプロセスは、自分の存在の原点に立ち返るといふ理解でよろしいかと思いません。

ここまでが胎息を始めるための準備です。浜辺では、波音に耳を澄ませ、海と

一体化することを想像していただいています。

次がいよいよ呼吸法です。浜辺では、息の出入りをほとんど感じないくらいに、できる限りゆっくりと深呼吸を9回行つていただいています。幾つか別の動作が加わります。まず、口を閉じ、息をごくゆっくり吸い込みます。胸よりも腹に満たすように意識して下さい。十分に満ちたら一度止め、それからやはりごくゆっくりと鼻から出します。薄い紙を鼻孔の前にかざしても動かないくらいのごく弱い流れで出します。息を出し終わったら、舌でもって歯と唇の間を万遍なく触れるようにします。唾液が出て来ますが、すぐには飲まないで下さい。同じように呼吸を3回繰り返すと、口中は唾液で十分に満たされるようになります。そこでももむろに顎を引き、胃ではなく、その下の丹田に送り込むことを意識して唾液を飲み込みます。ごくごくという音とともに、丹田に唾液が注入され、丹田が

かつと熱くなります。丹田など存在しないのになどと思わずに、自分の存在の原点に、ビックバンの光と物質世界のもとになるものが放り込まれたと思つてください。

以上の動作を3回繰り返します。つまり呼吸が9回、唾液を飲むのが3回です。それが終わったら、両手で足から腰、腹、胸、顔とくまなくこすります。丹田に注がれたものを全身に行き渡らせるためです。そして最後に髪に丁寧に櫛を入れてから眠りに就きます。必ずや朝までぐっすりと眠ることができます。

この呼吸法を20日も続けると、精神も肉体もいままでと違って来たときつと意識されるようになるでしょう。

——へーえ、そうなんだ。それくらいなら、やろうと思えばできなくはないのか



も。眠る前に全身をリラックスさせるのがいいってよくいうけど、そういうことなのかもね。

それで、呼吸法はだいたいわかったけど、「気」っていうのはなんなのかなあ？

㊦ よく「病は気から」と言いますよね。普通は、気持ち次第で病気になったり、

元気になったりもすると言うような意味にとるのですが……

——それって、なんか聞いたことあるような気がする。「気がする」っていうのも、「気」の字が入ってんだけど、そっちの「気」は「気持ち」とか「気分」とかの意味で、「病は気から」の「気」はそうではなくて、なんかよくわからないエネルギーっぽいもので、その流れがふさがると病気になっちゃうってことだったりす

る？ ちがった？

① アインシュタインの有名な  $E=mc^2$  という方程式をご存知でしょうか。これは、左辺のエネルギー (E) と右辺の質量 (m) がイコールで結ばれていて、両者は等価だということを表わしています。cは光の速さです。すなわち、物質が消失するとエネルギーになり、エネルギーが消失すると物質になるというのがこの方程式の意味するところです。

「気」というのは、古代中国人が考えた思弁的な存在で、その実態ははっきりしませんが、エネルギーと物質が合わさったようなものだと考えていただくとうろしいかと思えます。 $E=mc^2$  の等式の右側と左側を同時に行き来するような感じですか。気は存在の根源で、万物を生み、かつ万物の運動を生みます。気と対比さ

れる概念が理です。それは宇宙の根本原理で、アインシュタインの方程式のようなものです。

氣と理の関係を深く探究したの私達宋の時代思想家たちで、最終的には朱熹しゆきが壮大な理論体系を構築しました。それが朱子学しゆしです。私が生きたのは朱熹より少し前で、氣や理について様々な学説が次々に提唱され始めた時代でした。学問というものは、理論体系が建設されて行く過程がおもしろく、完璧に整合性のある体系が樹立されてしまうと、その後は人の思考を縛る息苦しいものになってしまふところがあります。

孟子は遙か昔の人で、氣について緻密な議論を展開するのではなく、直観に強く訴えるような提示の仕方をしました。氣は宇宙に充満する存在の根源であり、常に流動しているのですが、氣の中でも特に正しく力強いものがあって、それを

孟子は「浩然の氣」と名付けました。浩然の氣は「至大至剛」、最も大きく、最も剛いと表現しています。それを身の内に養って損なうことがなければ、ますます大きくなります強くなって、天と地に充滿するまでになると孟子は言います。つまり、体の内と外が一体化し、心の内に宇宙が包含されるのです。

——いつてることがよくわかんないけど、身の内にエネルギーみたいなものが満ちあふれて、ぼわっと爆発して外に出て行って、また身の内に戻ってくるようなイメージかな？

ⓧ 我が身の内に養った浩然の氣が天と地に充滿すると、天の法則に完全に合致した行動がとれ、いかなる不正義にも屈することなく、天地間にある一本の正し

い道を歩めるようになる、孟子は言います。「千万人といえども吾往かん」、全ての人が反対しても、自分は我が信念に従って進むと確信できるようになります。ちなみに、いまの日本の首相はこの言葉がお好みのようですが、完全に誤用です。権力者が「千万人といえども吾往かん」と嘯くのは横暴の極みです。野にあって本来は無力な人が、いかなる権力にも屈しないという意味で使わなければいけません。孟子は戦乱の続く時代に生きながら、天の道は正しく、人の本性は善であると主張し、そんなのは迂遠な議論で現実には全く役に立たないと嘲笑されても、決して屈することはなかったのです。

——浩然の気って、もしかして、AIっぽかったりする？ 何も恐れず、邪念に乱されず、内と外がつながって、天と地に充満するって、まるつきりインターネ

ットを自在に使うAIのイメージだったりしないかなあ。

㊦ 孟子の提示した浩然の気は後世に大きな影響を及ぼし、例えば、

時勢の行き詰ったとき、

浩然の気は人の節義として現れ、

その一つ一つの事例は、

歴史の記録として永遠に残されるものになる。

このように詩に詠んだのは、宋の時代の最後を生きた文天祥ぶんてんしょうでした。

話がどんどん横にそれて行きますが、私たちの宋の時代が終わったのは、祥興しょうこう

2（1279）年2月6日でした。そのとき、文天祥は捕虜の身として蒙古の陣営もうごに置かれて、宋の最後の皇帝が蒙古の艦隊に包囲されて入水自殺した戦場のすぐ近くにいたのです。

文天祥は私よりもちようど200年遅れの瑞平ずいへい3（1236）年に生まれ、21歳で科挙にトップで合格しました。普通なら出世コースを歩むところを、持ち前の強い正義感が災いして、時の権威者に嫌われ、官職にあるよりも隠遁生活を余儀なくされる時期の方が長いという日々を送りました。その権威者は内政、外政ともに愚かな事を積み重ね、ついには蒙古の軍団が都に迫り来る事態を招き、ついに失脚して処刑されました。接近しつつある蒙古軍を前に、要路の人々は無責任にも一斉に都から逃げ出し、幼い皇帝とそれを補佐する皇太后はもはや為す術を知りませんでした。ここに文天祥は1万の義勇兵を募って都の救援に駆け付け

ると、ただちに皇帝から宰相に任命され、蒙古と戦う決意を示しました。しかし、皇帝は文天祥に和平交渉を命じ、文天祥は蒙古の陣営に赴くと、あくまでも強気で臨み、蒙古に軍の撤退を要請しました。蒙古は文天祥を捕縛し、和平交渉は破綻し、宋は降伏し、ここにひとたび滅びたのでした。しかし、一部の残存勢力が皇帝の兄を擁立し、蒙古に対する抵抗を続けました。

文天祥は捕虜のまま北方に連れ去られ、その途中で脱走し、敵に追われてあわや殺されるという危機を何度もくり抜けて新皇帝のもとに走り、民衆を指揮して蒙古と戦いました。しかし、再び捕虜の身となつて、宋の最後の時を迎えたのです。敵の將軍は「宋はもう滅んだのだから、これからは蒙古に仕えよ」と文天祥に言いました。文天祥は拒絶し、元の都の北京べきんに連れて行かれ、約2年間の獄中生活を送りました。蒙古の皇帝クビライは、民衆に人気のある文天祥を何と



かして自分に仕えさせようと、あの手この手で説得しようとし、ついには自ら獄を訪れ、宰相にするとの約束まで持ち出しました。文天祥はあくまでも拒み、死を求めたために、皇帝クビライと会った翌日に死刑が執行されました。時に47歳でした。

文天祥は北京の獄中で浩然の気を歌った詩を作り、先ほど紹介したのがそのごく一部です。その詩の中で、歴史に記録された数々の事例を詠み上げ、例えば、安祿山の乱のときには、浩然の気は、

ちやうじゆん  
張巡の齒となり、

がんこうけい  
顔杲卿の舌となった。

と、詠みました。張巡は反乱軍に囲まれた町で、民衆を指揮して戦った人です。苦しい戦闘のたびに歯を食いしぼり、何本もの歯が折れたと言います。気はエネルギーであり物質であると言ったのを思い出して下さい。浩然の気は、反乱軍と戦う張巡のエネルギーを生み、そして歯になったのです。顔杲卿は先ほど申し上げた顔真卿の親族で、浩然の気は安祿山を罵る顔杲卿の舌になったといふのです。そしてもちろん、浩然の気は文天祥自身にも宿り、この詩を詠ませたのです。我が宋の最後に関わることなので、つつい力が入って話が長くなってしまいました。いまの浩然の気と、先ほどの瓦注を合せると、書に対する私の考え方が少しおわかりいただけるかと思うのですが、どうでしょうか。

——えーと、つまりは、自然に身の内から湧いてくる正しい何か任せるときに、

最高のパフォーマンスが達成されるってことかな。口から虫をべっと吐き出すって、前に聞いたことともたぶん通じているのかな。安易にべっと吐き出すというのではなくて、そこに宇宙の根本とつながるものがあるから、すぐれたものが生まれるということなんだろうね。

㊦ 長安滞在中の出来事をもう一つだけ語っておきましょう。

アルハラという言葉があります。あなたはアルコールにかなり強そうなので、一気飲みを勧められてもあまり困りはしないのでしょうかけれど、私は苦手です。お酒は好きでも、すぐに酔いが回ってしまうので、ゆっくりとほどほどの量を楽しみたいと思っています。しかし、そうはさせてくれない人がいて、何かと難儀しました。昔はアルハラなどという概念は毛筋ほどもなく、たくさん吞めてこそ男

らしいとされるような時代が最近までずっと続いていたのです。

——ボクは一気飲みくらいならできなくはないけど、あのワーワーやる雰囲気は好きではないな。集団の圧力で強制するのって、サイテーだと思うよ。集団に同化させるための通過儀礼みたいなものだったりするよね。アホだね。

さらにいうと、アルハラにセクハラが合体しちゃうと最悪、最低、アホの10乗ってところかな。アルコールで節度を失い、セクハラのスイッチがボンと入っちゃう人っているんだよなあ。男でも女でもね。ボクはいやなことをいろいろ言われてきたんで、お酒は好きでも、アルハラにはある程度敏感だと思っよ。

酒のせいでちよつとっつかり失言してしまいましたとか、そういう言い訳ってありえないよ。お酒で緩んで本性をさらしたただけで、失言ではなくて、それこそ

が真の発言なんだよ。さっきの虫を吐き出すのと同じで、ぼろっと出すのが本当のことなんだよ。発言そのものが許せない上に、酔っていたからって言う言い訳をするのがもつともつと許せない。

ついでにいうと、政治家がよく、誤解を招いたので撤回するっていたりするけど、誤解なんか100パーしてないんだよなあ。正真正銘の本当のところがよくわかったってことだよ。撤回してき、自分の発言を全否定するってことだよね。それをするのって、「この私は人間として100パー信用できません」って公言しているのに等しいよね。要するにバカ丸出しじゃん。

㊦ 私はアルハラおやじを「しっぱいじじおや執杯持耳翁」とひそかに呼んで敬遠していました。

——それって、どういう意味？

① 意識すると、「徳利奉行親爺とっくりぶぎょうおやじ」という感じでしょうか。鍋料理を囲んだとき

に、野菜から入るのだとか、それはまだ煮えていないだとか、やたらと仕切りたがる鍋奉行がいますよね。それと同じように、酒の呑み方を仕切りたがるのが「徳詩奉行親爺」です。

「牛耳ぎゅうじる」という言葉があります。どうして牛の耳なのかというと、大昔の中国で小国家同士が果てしない争いを繰り広げていたところに、つまり孟子が生きていたような時代ですが、戦争ばかりもしてられないと、ときに諸侯が集まって休戦協定を結びました。そのとき、協定の仕切り役が、牛の耳を執つて裂いて最初に血をすすったことから、「執耳しつじ」とか「持耳じじ」とかで取り仕切り役を言い表わ

すようになりました。そこに「杯」という文字を加えて、アルハラ親爺を指す「執杯持耳翁」という合成語を作ったというわけです。

さて、書道家の石蒼舒の友人に王頤おういという人がいて、ちよつとおもしろい画を持ってしていると聞かされたので、訪ねてみますと、ぎろりと目を剥いた道士の酔態を描いた画があり、かなりの迫力でした。こんな道士に、「やれ呑め、それ呑め！」と無理強いさられたらさぞ困るだろうなと想像すると、だんだんと怖くなって、たぶんそれが顔色にも出たのでしよう、王頤がにやにやしながら、

「どうです。なかなかのものでありましょう。ここに何か一筆書き添えていただけませんでしょうか」

その画は、見た人が感想を記した紙を貼り合わせて一つの巻物になっていて、何人かの人が短い文を添えていました。

私は筆を執り、思ったそのままに、

「我はこの執杯持耳翁をはなはだ恐れる」

と、余白に記して、我が名を書き添えました。

話はこれで終わりではなく、その後しばらくしてから、例の虎退治の章惇しょうとんが長安に来てその画を見て、私の「執杯持耳翁」に大爆笑したと書き添えました。章惇は豪快に呑む人で、私が一気飲みが苦手であるのをよく知っていました。

それから数年後に、再びその画を見たときに、章惇の書き込みを初めて知り、少し長く次のように書き添えました。

熙寧元きねい（1068）年十二月二十九日、私は長安に来てある人を訪ねたところ、王頤ぎがわざわざ「醉道士画」を携えてやって来て、弟や幾人かの友人の前にそれを



広げて披露した。私の一文の脇に、章惇が大いに笑わせてもらったと書き記しているのを見て、皆は私のことを笑った。

私はこの画の酔道士ばかりでなく、世の持耳翁全てを畏れる。章惇とは言え、持耳翁にいくら呑め呑めと言われたところで、まだ呑み足りないと応じるに違いない。

酒にはたくさん味わいがある。残念なのはそれを知る者が少ないことだ。持耳翁はただたくさん呑むのがいいと思っている。私は山水を巡り歩くのを好む。しかし、せんゆうたん仙遊潭の深い崖を渡ることはしなかった。やたらにどこでも行けばいいというものではないからだ。私はもともと酒を多く呑むことをしない。持耳翁などと深く付き合ったりはしないのである。

——いまのは、章惇はいわば「徳利奉行親爺」と同じように、崖にかかる丸太を渡るのを強要したけれど（[👉 第9回](#)）、トバー君は酒についても自然についても、自分のほうがその味わい方をよりよく知っているのだと、いまさらながらお返しをしたってことだよ。それだけ仲がよかったってことかな。

㊦ こうして長安での日々を楽しんだ後に、治平2（1065）年1月の初めに再び旅路に上り、そこからは帰心矢の如しと言いますか、一気に都に向かいました。長安から少し東の華州かのあたりを歩みつつ、弟にこのような詩を書いて送りました。

この三年の間、帰ることを思わない日はなかった。

夢の中で家に戻り、

しばらくしてから、現実でないと気付いたこともあった。

十二月の祭日に、酒を酌んで寒さを忘れようとしたときも、

ただ家に帰ることばかりが思われてならなかった。

一月のこの旅では、春を呼ぶ東風が吹いているはずなのに、

雪が衣にまとわりついて来る。

いま僕は、天に浮かぶ華山かざんの三つの峰の下を通り過ぎつつある。

じきに、潼関とうかんの四つの扉が日を浴びて開かれるのを見ることになるだろう。

そうすれば、都までの一里塚を全て数え尽くすのを妨げるものはもう何もない。

だから、君はいますぐにも、

家の御馳走を携えて、僕を迎えに出るのがよいのではないのかな。

固有名詞に対して煩わしい説明を加えないというルールを、前回あなたは定め  
ましたけれど、この詩の華山と潼関には少しばかり注釈を付けておきたいと思  
います。

箱根の山は天下の險 けん 函谷関もものならず かんこくかん

——いきなりまた歌って……。知ってるよ。それって、古い唱歌だね。お年寄  
り相手の仕事をしてるんで、聞いたことある。

㊦ 箱根の山道の険しさを強調するのに、中国の函谷関を持ち出しているのは、

この唱歌が発表された明治34（1901）年のころには、函谷関と言われてすぐにピンと来る人が多かったからなのでしょう。函谷関は、東の洛陽らくようと西の長安を結ぶ幹線道路のほぼ中間点の、地形的に険しいところにあつた関所です。

関所の位置は時代によって多少異なり、唐や私たちの宋の時代には、潼関とうかんにありました。潼関を越えれば、いまなお雪の舞うような土地を離れ、春の陽光に満ちあふれる宋の都まであとわずかだと、詩では歌っています。なおこの詩で「家」と言っているのは、都にある父と弟が住む家で、故郷の眉山びざん県ではありません。

華山は幹線道路の南に聳える高さ2000メートルほどの山で、詩で三つの峰と詠みましたように、険しい峰が幾つかあり、古くから信仰の対象とされています。中国五名山の一つです。

つまり、富士山を見ながら箱根を越えれば、江戸まであとわずかだと、そうい

う情景を思い描いていただくとやや近いでしょうか。

この詩を詠んですぐ後に、少々不可解な事件がありました。

私達一行は、馬正卿を先頭に、菩薩像等様々な荷を背にした馬とそれを曳く男が一行に連なって進んでいました。すると、突然1人の男が奇声を上げました。「ぎゃあ」と叫び、高く飛び跳ね、だつと駆け出し、馬正卿を追い抜き、何やらわめきつつ、次々に衣服を脱いで投げ棄て始めました。他の者が追いかけて止めようとしたが、男は丸裸になり、街道から離れ、ぴよんぴよん兎のように跳ねながら野を駆けて行きました。私はあつけにとられて見ているばかりでした。男の何かに足をひっつけたのか、ぱつたりと倒れ、そこに数人の男が飛びかかつて抑え付けました。しばらくは叫びつつもがいていましたけれど、そのうちぐつたりとおとなしくなりました。

私がある場に行くと、土地の者たちが集まって来て、このようなことを言いました。

「この者は岳神様のお怒りに触れたに相違ありません。この先に、岳神様のお社がございます。この者が何をやらかしたのかわかりませんが、岳神様のお赦しいただかなければ、この先どのような祟りがありますやら。この者ばかりでなく、皆様方にも、とんだ禍が及ぶかも知れません」

それを聞いて、一行の者は気味悪がり、

「こやつが神様を怒らせたのなら、こやつがせいだ。俺たちまで関わり合いになるのは、とんだとばっちりだ。ふんじばって神様にさしあげて、引き裂くなり食うなり何なり、気の済むようにしてもらったらいい」

一人の者がそう言うのと、

「そうだ、そうだ」

と、皆で縄をかけ、担いで行こうとしました。縛られた男はぶるぶる震え、泣き出してしまいました。

私は皆を制止し、

「この者はいま私のもとで働いてもらっている。この者についていま私が全責任を負っている。だから、この者が何か悪いことをしたのなら、私が罰すべきかどうかを決める。たとえ岳神であろうとも、私に断りになしに罰することはあつてはならない。もしも私が一国の王であるのなら、我が国の民を他国の王の前に差し出し、『どうぞ勝手にして下さい』と言うのはあり得ない。王として他国の王ときちんと談判しなければならぬ」

私は一同を引き連れて岳神に社に行き、神に向かって次のように言いました。



「岳神殿にひと言申し上げる。

私は3年前に東から西へとこの道を通った。そのときここに詣でることをしなかつた。今日また西から東へとこの道を通り、やはりここに詣でることをしようとしなかつた。それが無礼であると咎めるために、この男に不可解な行動をとらせたのか。私は公務を帯びての移動であるから道を急ぐのであつて、あえて岳神殿に無礼を働くのではない。

土地の人々は、岳神殿の怒りがこの者を狂わせたと言う。果たして神がそのよくなことをするのだろうか。この者は、岳神殿から見れば、いわば虫けら同然、神の威霊をわざわざ見せつけなければならぬような相手ではあるまい。この者に何か隠れた罪悪があるのか。それを岳神殿だけが知っているのか。たとえ罪悪があるとしても、神に無礼であるとか、衣類や食べ物を盗んだとか、せいぜいそ

んなところであろう。いずれにしてもちっぽけなことで、岳神殿がわざわざ責めるほどのものではないであろう

岳神殿の威霊の重々しき、威光の遠く広く及ぶことを思えば、世にははなはだ大きな悪事を為す者があまたいるのであるから、そちらをこそ罰すべきではなからうか。大きな悪は放置し、こんな男のちっぽけな罪だけは許すまいとするのは、岳神殿の面目にとって果たしていかなものであらうか。

私はしがたい役人に過ぎず、こんな男でも、ものの役に立たなくなるとまことに困る。何はともあれどうか大目に見てやってほしい。私は愚直であるから、岳神殿に向かつても思っていることをそのまま言わずにはいられない。以上である」

声高に私が言うのを聞いて、社に集まった物見高い連中は驚き、我が一行の者達は青ざめてしまいました。

——けっこう威勢のいいことをいったんだ。大きな悪は見逃して、ちつぽけなものだけをこらしめるなんて、みつともないよって、かなりのイヤミかも。大衆を惑わす迷信をきらうトバー君らしいと思うけど、神様がこれでカツカと怒ったら、メンドくさいだろうね。

㊦ 馬正卿は、

「これで若旦那様にどのような災厄が降りかかって来ますやら、ちよつとした見ものでございますな」

と、にやにや笑っていました。

私は男を縛っていた縄をほどかせ、衣を着るように言いました。男はすっかり

しよげかえって、叫んだりあばれたりすることはもうありませんでした。

私は社を後にし、もとの街道に戻り、一行に向かって、

「では、行こう」

と、号令をかけました。

まさにそのとき、びゅーっと一陣の風が吹いて来まして、皆の顔を強く打ち、土煙を高く上げて通り過ぎて行きました。その日は雲ひとつない晴天で、穏やかないい陽気で、風もそれまで一切吹いていませんでした。

誰言うとなく、

「これは岳神様に謝りに戻らなくてはならないということではなからうか」

と、ざわつき出しました。

私は列の先頭に立ち、

「行くぞ」

と、再び号令を發しました。馬列が歩み出すと、地をどよもすようにして激しい風が襲って来ました。頭から砂粒がざーっと降り注ぎ、

「殺される！」

最初にあばれた男が叫びました。

「そなたの命は私が預かっている。誰にも勝手にさせない」

私は吹き来る風に、敢えて胸をそらして馬を進め、

「岳神が怒ろうとも、私は畏れはしない」

風はますます強まり、馬正卿が馬を寄せて来て、

「神様との意地の張り合いでございますか。神様も悪い相手を選んだものでございませぬ」

その笑い声も、風に流されてよくは聞こえませんでした。

「禍福は天にある。岳神が怒りたければ怒ればいい。私はこの道を行く。私は止まらない。岳神が止めることなどできやしない」

1月ですから、風は冷たく、強く吹かれればたちまち身が凍えます。全身が氷になろうとも、指がちぎれようとも、断じて退くまいと進み続けました。

他の者は風に阻まれ、怯える心でその場を右往左往するばかりで、ついて来たのは馬正卿だけでした。

風が激しかったのはほんの一時ひとときばかりで、徐々に弱まり、土煙は薄れ、しばらくするとぴたりと止んで、何事もなかったかのように穏やかな天気に戻りました。

「岳神も根負けしたようでごさいますな。これで、若旦那様も、諸葛孔明しよかつこうめいの向こうを張って、風を自由に操れると評判になりましたよ」

今度は馬正卿の笑い声がよく聞こえました。

後れた一行も追いつき、その後は何事もなく、異常を来した者も含めて無事に都に着いたのでした。

——突風が吹いたのは、地形条件とか気象条件とかから、たまたまそうなったということなんだろうけど、話としては、意地の張り合いでトバー君が神様に勝利したってことかな。それにしても、最初に裸になった人は、どうしたのかなあ？

㊦ 本人に聞いてもさっぱりわからないと言うだけで、たぶん心因性の何かだったのでしょう。

——トバー君が言ったみたいに、大きな悪をガツンとやっつけてくれたら、神様を信用してもいいんだけどなあ。世の中には、超能力者とか霊能者とかを自称する人がいたりするけど、その力で何をするのかといったら、どうでもいいみみっちいことだけだよ。大昔にはやったスプーン曲げとか、笑っちゃうよね。どうせなら、国会の傍聴席から総理大臣を操って、あらいざらい心の内をしゃべらせるようなことをしてみせたりしたら、楽しいんだけどなあ。国会中継の視聴率が一気にねあがるよね。

① 都に2月初めに到着し、弟と3年ぶりの再会を喜び合ったのも束の間、官に仕える身は思うようにならないのが常で、弟は都の外に職を得て、すぐに出て行ってしまいました。ただ弟の任地は鳳翔と比べたら都にずっと近く、手紙の行き



来にしても以前よりかなり短期間で可能になり、何かのときには会えることもあるだろうというのが、やや心慰められることでありました。

私もすぐに今度は都での新しい職務を授かりました。判登聞鼓院ほんとうぶんこいんというもので

した。「登聞鼓」という太鼓を所轄する部署の職員です。登聞鼓は皇城の前に据えられ、非道に苦しむ民衆がそれを叩いて皇帝に直訴することができるというものです。日本では江戸時代に目安箱めやすばこというものが置かれて、民衆が投げ文ぶみをして将軍に直訴したということがあったようですが、それは登聞鼓をヒントにしたものだとも言われています。ごく平たく言うと、お客様苦情係に任命されたということになるでしょうか。

公共の場に置かれた太鼓を叩いて皇帝に訴えるのは、実際にはかなり勇気のいることで、そうしばしば鳴らされたわけではありませんが、それでも太鼓が叩か

れて国の制度が改まった事例はいくつもあります。

民衆の声を聞き取ろうとする登聞鼓院が私の職場になったのは、もしかすると、鳳翔での最後の年に、民衆の枝葉末節に心を配るということを意識していたことが、朝廷の誰かの耳に達したからだったのかも知れません。

——太鼓やさんになって、民衆の声を汲み上げることができた？ 太鼓が叩かれるのを役所で待っているよりも、庶民の話を自分から聞き取りに行ったほうがきつといいと思うけど。昔の時代劇に、こんな感じの酒場にお忍びで出かけて行った將軍がいたりしたけど、そんなことはしなかった？

① 愉快的エピソードを一つでも語れるといいのですが、実は、登聞鼓院に勤め

たのはごく短い期間だけで、実質的な仕事はほとんど何もしないうちに終わってしまっただけです。

「お忍び」というので思い出したことがあります。宋の都の開封は、計画された都市の典型であった唐の都の長安とは大きく異なり、いわば行き当たりばったりで巨大化した都市で、ごく卑俗な繁華街のかたわらに政府の要人が住んでいるというようなことも珍しくありませんでした。私より数十年前の大先輩の魯宗道ろそうどうという人は、浴室巷よとくちやうという歌舞伎町のようなところのごく近くに住まいを構え、皇城から下がると庶民の衣服に着替え、浴室巷の酒店で一杯やるということをよくしていました。

あるとき、郷里から知り合いが上京して来たので、魯宗道は早々に仕事を切り上げて、友を連れて浴室巷へと繰り出しました。

間の悪いことに、皇帝が急に、

「尋ねたいことがあるから魯宗道をすぐに呼べ」

と命じたので、使いの者が魯宗道の執務室に走ると、もう帰宅したというので、大急ぎで家に駆け付けました。そこも不在で、使者は途方に暮れた門の前で待っていますと、すっかり御機嫌になった魯宗道がようやくやく帰って来ました。

使者は青い顔で、

「私はただちにお上のもとに戻りますが、あなたさまもすぐにお越しく下さい。なぜかように時間がかかったのかと、お上からお尋ねがありましたときに、どのようなにお答えしたらよろしゅうございませうか。あなたさまと齟齬がなきようにお教えいただければ幸いです」

「齟齬も何も、そなたが見たままをお答えになればそれでよろしい」

「それではあなたさまにどのようなお咎めがありますやら」

「このような格好で町の酒店で飲んで罪になるのか。飲酒は誰もがすることだ。お上に嘘を申し上げることの方が遥かに大罪ではないのか。ありのままをお上にお伝えいたいただきたい」

使者は去り、そのままを皇帝に報告しますと、すぐに魯宗道が顔を見せ、確かに酒に酔っている様子に、皇帝は言いました。

「酒を飲むなどまでは言わぬ。しかし、どうして町の俗な店に行くのだ。そちは朕に仕える身だ。万に一つの過ちがあってもいけないということを考えなければならぬ」

「今日は郷里より知り合いが参りまして、貧乏な私には余分な皿やら器やらがなく、もてなすことができませんで、酒店に参れば自ずと全ての物が具わって

おりますから、そこに連れて行った次第にございます。私めは官服を脱いで行き  
ましたので、町の者には誰であるのか知れることはなかったと存じます」。

一切の包み隠しをしない魯宗道の態度を皇帝は喜び、後に朝廷の大役を任せら  
れることになったのでした。

——ふーん、話の通じる皇帝でよかったね。宋の社会は案外と風通しがよかつた  
りしたのかな。

Ⓣ 多くの官員は、科挙に合格する前は、私と同様に一般庶民として暮らしてい  
たわけですから、政府の要人といえども大衆との距離は、それ以前の時代に比べ  
てずっと近かったと言ってよろしいでしょう。しかし、日本の政界に似て、二世、

三世が増えて来ると、次第に格差が固定化される弊害が生じるようになりました。魯宗道は、高官の子弟は試験なしで官員になれるという特権に対して、非常に批判的な言動で知られていたということを付け加えておきたいと思います。

——庶民の盛り場に行くような人はやっぱ違うんだね。高級ホテルのバーで飲んだり、五つ星レストランにしか行かないような連中は信用ならないよなあ。

㊦ 登聞鼓院での仕事がすぐに終わってしまったのは、試験を受けるよう命じられて、しばらく家に閉じ籠ってその準備に専念するようになったからです。

——えっ、また試験？ 何回目？ 昔のお役人って、そんなに何回も試験を受け

るものなの？ いまも昇進試験とかあるようだけど。

① 普通は科挙に合格すれば終わりです。誰だって試験は好きではなく、科挙の二次試験までやればお腹いっぱいです。私と弟は科挙の後に、特別試験の制科を受け、さらにこのとき、学士院に入るための試験を受けよと言われました。


学士院というのは皇帝直属のシンクタンクのようなものだと思います。からよろしいでしょうか。皇帝が何か疑問に思うことに対して、資料を揃えて答えるというのが大事な職務としてあり、皇帝と直接顔を合わせる機会があることから、そこで皇帝の信頼を得ると、行く行くは宰相クラスに抜擢される可能性があります。り、学士院に入るといっものは出世ルートの一つとされています。普通は、様々な実績を積んで、学士院の一員にふさわしいと十分に認められた者が選ばれるの



で、鳳翔でたった3年間を務めただけの私などはまず対象外でした。

私が試験を受けるようになった経緯をお話すると、嘘のような自慢話になってしまうのですが、もしかすると本当に嘘なのかも知れません。私にこうだったと聞かせてくれた人が、噂話に尾ひれを付けただけという可能性も大きいのです。

事は英宗皇帝えいそうから始まりました。皇帝は即位から2年が経ち、ようやく自ら国家の運営に取り組んで行ける自信を抱きつつありました。

——えーと、その皇帝って、たしか皇帝になりたくないって逃げた人だよね。無理やり即位させられてからも、病気だとかいって表に出てこなかったんだよね  **第7回**。

Ⓣ もともと聡明な方で、深く考え込んでしまう性格であったのでしょう。皇帝の任にはとても耐えられまいと真剣に悩み過ぎて、心身の不調を来したと推測されます。

少しずつ体調が回復し、自ら主体的に自分の使命を果たそうとしたときに、最も重要なのは何であるかと考えたなら、前の皇帝が范仲淹はんちゆうえんを用いて着手しながら不十分な成果しか挙げられなかった国政の改革に取り組むことであると、思い至つたに違いありません。

もしもあなたが皇帝だったら、どういう体制で改革に取り組もうとしますか。ちなみにこのとき皇帝は34歳でした。

——ボクとそれほど変わらないのかあ。えーと、ここでぜんぜんレベルの違うこ

とをいうと、介護の世界でよく聞くのは、リーダーのなり手がなかなかなくて、まだ2、3年目の若い人に任されるようなことが結構あって、そういう人がリーダーをやらされると、かなり難しくて、つぶれてしまうことがあるんだ。だって、職場には、ずっと年輩でずっと経験も長い非常勤職員とかがたくさんいたりするから、職場運営がとつても面倒だったりするんだよね。それで、ますますリーダーのなり手がいないという悪循環になってしまうんだ。

いまの職場でボクがリーダーになる可能性は100パーないから安心していいけど、若いリーダーにとつて、口うるさい先輩というのはかなりのクセモノなんだよなあ。ボクがもしも皇帝なら、自分と同じように若い人と仕事をしたいよね。とくに国の改革をするんだったら、若い人でないとダメなんじゃないの。40とか50とかになったら、結局は自分を守るようなことしか考えないんだから。

Ⓣ 当時の政権の中枢には富弼ふひつ、韓琦かんき、歐陽脩おうようしゅうといったスーパースターたちが居並び、その人たちは自分達の手で改革を行おうとそれぞれに意気込んでいました。このとき富弼は62歳、韓琦は58歳、歐陽脩は59歳で、特に韓琦が宰相として全ての面で皇帝を補佐していました。逆に言うと、皇帝は韓琦に相談しなければ何一つ決めることができませんでした。そもそも英宗を皇帝の座に据えたのは韓琦で、英宗が心身の不調を来して宮中の奥に籠ったとき、韓琦は政治を停滞させないために皇太后を引っ張り出し、皇太后が政治に強い意欲を示して実権を掌握しようとする、剛腕を振るって皇太后を引っ込め、英宗の親政を実現させました。いわば韓琦のシナリオで政治がまわるようなところがあつたのです。それに対して批判的な人達もいて、スーパースターの中でも韓琦と富弼の不仲説が噂

されたりもしていました。

英宗皇帝は韓琦がいなければ何もできない状態から。何か新たな体制に変えられないかと思案し、どうやらこの私に目を付けたのだらうと思われます。私はこのとき30歳で、我が父のお蔭もあって韓琦や欧陽脩と縁が深く、逆に富弼にはあまり気に入られていませんでした。私を用いても、韓琦や欧陽脩の気持ちを損ねることはなく、若い世代を今後登用して行く突破口になると考えたのではないのでしょうか。

皇帝は、私を皇帝付きの秘書室に呼びたいと韓琦に相談しました。知制誥ちせいこくという職で、皇帝の名で出す文章を起草するのが主な任務で、皇帝と非常に近いところで仕事をします。

韓琦は難色を示し、

「蘇軾は、お上のご覧になる通り、その器量は大きく、いずれ天下のために大きな仕事をするようになるのは間違いありません。そのような者であるから、早くからお近くに置いて育て上げようとお考えなのであります。天下の士がどのように見るかを考えないわけにはいきません。蘇軾を羨む心をいたずらに天下の士の植え付けるような事態になったならば、蘇軾本人にとってもよろしいことではないではありませんまいか」

——つまり、皇帝にえこひいきされていると、人々が嫉妬したら、トバー君のためにならないってことだね。

① 韓琦がこのように言うのは、多分皇帝は予測していたのでしよう、

「ならば朕の日常を記録する係ならどうか」

と、すぐに言いました。

いま日本の国会では総理大臣が特定の相手に便宜を図ったのではないかということが問題にされ、公的な記録が見つからないことをもって、便宜を図ったことではないと主張しているように見受けられますが、皇帝がいつ誰と会ってどのような発言をしたかということ、日本の総理大臣より遥かに国家にとって極めて重大なことでありましたから、公的な記録が見つからないなどという釈明がそもそもないように、逐一記録が取られていました。記録係は特に実権を伴うものではないのですが、皇帝のすぐ近くにいつもいるので、韓琦は、皇帝との距離が近すぎると、再び難色を示しました。

しかし、皇帝の意向を二度も否定したままではどうかと思ったのでしよう、

「蘇軾にはまだ鳳翔府で勤めただけの経験しかありません。蘇軾が用いられるのも成程当然であると、十分に天下の士が納得するような状況が作れるのであれば、何らかの職責を蘇軾に与えることもあるいは可能でありましょうか」

皇帝はそのように言うのを待っていたのでしよう、

「ならば、学士院はどうか。学士院は学識のある者が入るところだ。蘇軾には学士院にふさわしい学識があると、天下の士が十二分に納得するよう試験を課したらどうか。蘇軾の答案を公表すれば一目瞭然ではないか。とやかく言う者は1人もおるまい。これ以上に公正なやり方はないと思うが、どうか」

皇帝と韓琦の間で実際にこの通りのやりとりがあったどうかはわかりません。

あくまでもそのようであったと話してくれた者がいたということです。私はこのように聞いて、かたじけない、名誉なことだと思ふよりも、これは大変なことに



なつたと感じました。皇帝の期待に応えるために、天下の士を納得させるだけの答案を書いて試験に合格しなければならぬのです。

——それって、オリンピックで金メダルを期待される重圧とどっちが大変なのかなあ。オリンピックは「楽しみたいと思います」という人も多いけれど、「試験を楽します」とはさすがのトバー君も言えなかつただろうね。

Ⓣ 私が初めて上京したのは科挙を受けるためでした。2度目の上京は母の喪を終えて任官のためでしたが、都に着くとすぐに制科を受けることになりました。そして今回の3度目の上京でもまた試験を受けることになり、都ということなぜか私は試験ばかりで、それが都によい印象がない理由の一つになっているのだろう

と思います。

——トバー君でもやっぱ試験はいやだったんだよね。それで、受験勉強って、どんなことをしたの？

㊦ 試験は論文審査です。何かを論じるには、どのような筋道を立てるのかというのが重要であるとともに、論拠となるものをなるべく数多く、幅広く様々な古典から引用しなければなりません。多数の論拠を正確に引いて来られることが重要な能力と見なされていたのです。試験の予告から実施まで3カ月ほどで、そのわずかな期間で儒学の経典や史書を総復習しなければなりません。

そして、その勉強の真つただ中の5月28日、妻がこの世を去ったのでした。

——えつ、そういうことだったんだ。それは厳しかったろうねえ。

㊦ 妻は、私が勉強に専念できるようにと、病気であることをひた隠しにしていたのでしよう。私は勉強のことばかりを考え、異変に気付くことも、妻のそうした気遣いを感じることもありませんでした。最後のころは、恐らく、試験が終わるまでは何としてでも生き続けようと、妻は懸命に務めていたのだろうと思います。しかし、その前に命が尽きてしまったのです。

——そうなんだ。つらい話だねえ。もう試験どころじゃなかった？ 逆に奥さんのためにも合格しないとならないって思った？ 海老蔵さんも新しい舞台を務め

るみたいだけど。

① 当時のことを思い出すと、私の感情はしばし空白であったようです。何が起こったのか、一応のところは承知はしていても、本当にはわかっていませんでした。私の脳はすっかり受験モードになっていて、妻の死を受け止めるための回路が働かなかつたのかも知れません。

ささやかな葬儀を行い、都近郊の仏寺に妻の棺を安置しました。そうした段取りは我が父が馬正卿とともに行ってくれました。父も馬正卿も妻が尋常ではないことに気付いていたのでしょう。でも、そのことは、後になっても一切何も言いませんでした。

妻の棺を寺に託したとき、我が父はこのように言いました。

「いずれこの棺は、君の手で、君の母の近くに埋めてやりなさい。君の妻は君の母が選んだ。その一事を見ても、君の母は全く誤ることがなかった。君の妻は君以上に君の母のことがよくわかっていた。君は2人に教え導かれたことを心に銘じなければいけない。君の母は君が科擧に合格したときに亡くなった。さればいま君は何をすべきか、言うまでもあるまい」

それはこの時点での最も適切なアドバイスでありました。私はいつしか妻の棺を故郷に持ち帰るまでは悲しむことを封印することにし、目の前の受験に気持ちを集中させたのでした。

——そんなもって、試験には合格したの？

① 与えられた二つの課題に対して小論文を書き、合格しました。そして受験の重圧から解放され、学士院の一員になると同時に、自責の念が猛然と湧き上がって来たのでした。

ところで、あなたは我が姉に似ていると言ったのを覚えていますか。

——えーと、最初は、ヘンなことをいうなあ、ちよつと気持ち悪いかなあくらいに感じたよ。でも、お姉さんが嫁ぎ先で虐待され、若くして亡くなったというのを聞いて、**② 第2回**、ボクなんか似ているとかいわれたら、そのお姉さんに申し訳ないなあって思った。

③ その姉に対して先方の夫がしたことと、私が妻に対してしたことと、どれだ

け違っていたのでしょうか。姉の夫が、我が姉のことを全く尊重せず、邪慳にし、病気になっても放置して死なせたことを恨みました。私は果たしてそれとどこか違ったのでしょうか。どう思いますか。

——どう思いかって聞かれても、トーパー君とはぜんぜん違うんじゃないの？ 虐待なんかしてないよね。奥さんのアドバイスを素直に聞いたりしていたし……。

① 私はもともと結婚を望んでいませんでした。周囲が整えるのに従って妻を迎え、恋愛感情とかいうのとは完全に無縁で、あるときに1人の女性が私の妻になったという事実を、特別な感情なしに受け入れたのでした。その後も、妻に対して特に変わった情感を抱いているとの認識はありませんでした。

鳳翔において、私は公の事に専念し、内の事は妻に任せ切りでした。妻のアドバースを受け、それによって私は変わったので、妻には感謝の思いがありました。

一方で、私から妻に助言したり、手伝ったりしたことはありませんでした。もつと言え、妻に対して特に気持ちを向けるということがありませんでした。1人の女性が自分の妻としてすぐそこにいるということを最初に認めてからは、それ以上の感覚は私にはなかったのです。おわかりいただけますか？

——よくわからないけど、自然とそこにいるだけで、あえて強い関心を持つまでもないってことかな。

① 姉の夫は、向こうの家のやり方に姉を従わせようと思いました。向こうの家に



は不道德であると非難されるべき一面がありました。その点は我が家と違っていたと、ことさらに言うのは大して意味がありません。夫の家の事情に否も応もなしに従わせた点において、我が妻も少しも変わらないのではないでしょうか。私には従わせたという認識はありませんでした。妻は最初の日から我が家の一員として完全に同化しようと思命に努めたに違いなく、私は全く無頓着であつたのです。

姉の夫は、病気の妻を放置しました。私は妻が病気であることに気付くことさえありませんでした。果たして、どちらが罪が軽くどちらが罪が重いのでしょうか。

——でも、受験勉強に専念しなければならなかつたんだよね。奥さんの病気を気

にかけて、勉強に手がつかないみたいなことになったら、奥さんとしては不本意だということだったりしないのかなあ？

㊦ 鳳翔から都に帰る旅の間、私は解放感にひたって遊んでいました。そのときでさえも、妻の様子に気付きもしなかったというのは、なかなか言い訳ができないことのように思います。

試験が終わって、最も辛いと感じたのは、息子が私に隠れて泣いている姿を見たときでした。妻が死んでも私は試験を受け、学士院という新しい職場で仕事に取り組もうとしているのを見て、息子は父の前で悲しみを表に出してはいけな**い**と思つたのでしょう。息子はこのとき7歳で、懸命に自分の感情を抑えていたのです。それ見て、息子に対して申し訳ないことをしたと思ひました。妻が病気で

あるともっと早くに気付いていたら、母と子の別れをもっと後にすることができたと違いありません。

そのように息子のことを思って、ようやく我が心の内にあるものが知れて来ました。私も本当は悲しかったのです。あのような女性がどうして私の妻であったのか、それが当たり前のようできて全く当たり前ではなかったと、初めて気付きました。私にとって妻ほどに大切な女性はいなかったのです。妻ほどに愛おしい女性はいなかったのです。

どうして妻がいる間に気付かなかったのか、自責の念がふつふつと湧き上がって来ました。自分を責めるしかありませんでした。

そのような状況で、私は学士院の一員として仕事を始めたのでした。

——かなり厳しいね。また5月病じゃないけど、精神的にきつかったらうね。

Ⓣ 皇帝のすぐ近くで仕事をするというのは、経験のまだない私にとって相当に気を張り詰めていなければならないことでした。たぶんそのお蔭なのでしょう、鳳翔でのように寝込んだりするには至らずにすみました。緊張感がどうにか私を支えていたのです。

学士院では、皇帝が何かしら疑問に思ったことに対していつでもすぐに答えられるようにということ、順番に夜勤もありました。

——へーえ、そうなんだ。夜勤には特別な手当とかあったの？ たぶんなかったらうけど。



昔の官員の俸禄は時間給でもなければ成果主義でもありませんでした。24  
時間全てをお上に捧げることが前提となつて頂戴するものでした。

皇城内で寝ずの番をしたときに詠んだ詩があります。

遙か東の海に浮かぶと言ほうらいさん えいしゅうざんう蓬莱山や瀛州山、

そこにある神仙の宮殿と同じく、

ここ大宋の皇城は俗世間の塵から遠く隔たり、

皇帝がお好みになる天上界の香りが、

私の宿直する建物にも漂って来ている。

冷たい光が宮殿の瓦に注がれているありさまは、

月光のもとにおしどり鴛鴦が伏すかのようであり、

淡い霧が高い樓閣になびいているありさまは、

雲の内におわたリ鳳がわだかまるかのようにである。

夜の更け行くのをここで過ごす私は、

古今の治乱を論じる相手もなく、

ただ一人で少々の酒と向き合うだけである。

隠者の最たる者はあえて山に隠れるまでもなく市中に在ると言う。

ならば、ここ皇城の内にあつても、

夜空を飛ぶ鶴を見上げ、

暁に鳴く猿の声を聞く情趣は、


味わえないことはないであろう。

——よくわかんない詩だけど、皇帝の住むところが仙人の住いのように神聖な場所なら、そこに身を置く自分も仙人に通じるものがあるかと、妄想したってことかな？ トーバー君は、酒は強くないはずなのに、夜勤の間に飲んでよかったの？ 皇帝の呼び出しがあったら、さっきの歌舞伎町に繰り出したおじさんより困ったりしたんじゃないの？

① 実際に酒を飲んでいたかどうか問わないで下さい。詩にそう詠んでみたというだけです。

このような詩を詠みつつも、実際の私の精神状況は、仙人のように枯れたものではまるではありませんでした。妻の死ともう一つ、政界のある事情が私の気持ち

を蝕みつつありました。

私が試験に合格した夏の頃から、英宗皇帝の父をどのようにに祀るのがいいのかという論争（ 第7回）が始まっていました。この詩を詠んだのは冬で、論争はかなりの過熱状態になっていました。論争の内容は、いまのあなたの興味をひくようなものではないので、もう説明しませんが、単純化すると、韓琦や欧陽脩を中心とする重鎮グループ対若手官僚グループという対立の構造になっていました。重鎮を論破すれば、政権の担い手の世代交代が進むと若手は張り切り、重鎮はそうはさせまいと頑健に抵抗し、純粹に議論が成熟して一つの結論に達するというようなことでは完全になくなっていました。重鎮の中でも、韓琦とは不仲が噂された富弼は、この争いを避けるかのように、病氣療養を理由に職を辞して都を去りました。若手は政策批判もからめて重鎮を追い詰めようとし、ついに韓琦は持



ち前の剛腕ぶりを發揮し、批判派を都の外に放り出すという荒業に打って出ました。かつて范仲淹は、当時の権威者に睨まれて何度も都から放り出されました。他のスーパースター達も皆同じようなことを経験させられました。そうでありながら、自分達が政権を担うと、やはり同じようにして若手の声を潰そうとしたのです。

韓琦や欧陽脩は私が8歳のころから憧れて来た最も尊敬する人々です。そうでありながら、実際の政治においては、理想というものが、現実という重い泥の流れのようなものによって押し流されて行くのを、私は目の当たりにしなければなりませんでした。そうした政治の場に我が身を置き続けることに、私は強い違和感を覚え始めたのでした。

そのような権力抗争を目の当たりにしなければならぬということが、都が好

きではないと感じるもう一つの理由になっています。

——政治の世界ってなんかしようもないと思ったりするよなあ。野党時代に厳しく非難したことを、自分が政権を取ると平気でやったりするんだよ。それくらい身勝手でないよ、政治なんかできないってことなんだろうけど、信用できないって感じになるよ。まともな人は政治なんかしないよね。ボクなんか、政治家になったらなんて言われたら、サイテーの侮辱だと感じるな。

① このときの論争には、私はほとんど関わることはありませんでした。なぜなら、第一に、英宗皇帝が私に何を期待しているのかを推し量ると、軽々に自分の考えを表明することはできませんでした。皇帝が私を特に用いようとしたのは、

重鎮から若手へのスムーズな移行の橋渡しになるということでしたから、どちらの側に付くにせよ、論争に加わったら、その期待を裏切ることになります。第二に、私は鳳翔での最後の年に、民衆のために枝葉末節に特に意を払いました。今回の論争がどちらかにより正しさがあるうとも、民衆の生活と遠く隔たっていることに変わりありません。第三に、妻の死が私の活力を減退させ、第一の理由も第二の理由もなくとも、敢えて争いに入って行くようなことはなかったろうと思います。

——トバー君って、純情で繊細なんだね。



年が改まって治平3（1066）年となった頃から、我が父が体調不良を訴え

るようになりました。初めは風邪のようであったのが、少しもよくならず、いつしか床についたままになってしまいました。

欧陽脩はそうした様子を心配してくれて、ある医師が調合した薬を贈って下さいました。しばらく飲んでもよくなる気配がなく、欧陽脩はまた別の医師が調合した薬を贈って下さいました。その2人の医師というのは、実は先代の皇帝の最後を看取った有名な医師でした。

医師の1人をぜんじょう単驥と言います。科擧を受けて落第したのをきっかけに、医学で身を立てようと決意し、独学で医書をマスターし、独自の観点から実際の治療を始めると大いに効果があり、たちまち名高い医師となりました。当時は医師になるための学校などはなく、自分で医者だと宣言すればいつでも医者になれ、実践によって世の評価を得られればそれでよかったです。

そのころ先の皇帝は病気がちで、孫兆そんちようと言う評判の名医を宮中に呼んで治療に当たらせることにしました。孫兆は一人では心細いということであつたのでしよう、単驤を誘いました。孫兆と単驤は2人で治療に当たり、幸いにも皇帝は持ち直し、2人は面目を施し、褒美を与えられました。

ところが、次に容態が悪化して2人がまた呼ばれますと、今度は手の施しようがなく、皇帝は死んでしまいました。現代の医学でも治せない病気はたくさんあるわけですから、当時としては仕方ないことであつたのでしょう。しかし、事は皇帝の生命に関するところで、国家の命運も左右しかねないので、治せなかつた医師には重大な責任があると、2人の罪は死に当るということになりました。名医の評判を取るといふのはまことにやかいなものです。さすがに死罪は気の毒すぎるといふことで、今後医術をもつて人を惑わせてはならないと言ひ付けられて、

放免となりました。

2人はしばらく都の片隅に逼塞し、知人の支援を受けつつ再び世に出る機会を伺っていたのですが、歐陽脩が贈ってくれたのはその2人が調合してくれた薬でありました。

父の病状はその薬によって回復に向かうことはなく、先の皇帝と同じ運命をたどったのです。

——それって、つまり、亡くなったということだよね。やっぱ藪医者だった？ 贈られた薬を飲まなければよかったですか？

ⓧ そういうことではなくて、もはや薬が効かないまでに病状が進んでいたのだ

と思います。昔の薬は、病原菌を直接叩くように病気そのものを治すものではなく、人の持つ自然治癒力を高めるものでありましたから、病気の始めであればあるいは効果があったのだらうと思います。

我が父が死んだのは4月25日のこと。我が妻が死んでからまだ1年になっていませんでした。こうして都で不幸が重なったことも、都が好きになれなかった理由の一つとなっています。

——いろいろ大変だったんだ。いまさら悔みをいってもしようがないけど、お気の毒さまでした。

でも、お父さんの場合は次第に重くなったんだらうから、奥さんとは違って、最後に言い遺した言葉とかあったのかな？

㊦ 父の最後の心残りは『易経』<sup>えききょう</sup>の研究がまだ完成していないことでした。『易経』は儒学の重要は經典の一つで、古い占いの本です。父はその研究をずっと続け、私が鳳翔に赴任していた間は、我が弟とともに、注釈書を著すべく研究を深めていました。父は私に向かって、『易経』の注釈書を完成させよと言い遺しました。その後かなりの時間を要しましたが、父の遺言はどうか果たすことができました。

——エライね。親孝行なんだ。占いについてトーバー君が詳しいのなら、今度なにかのときに占ってもらおうかなあ。



㊦ 岳神にもしも人を罰する力があるのなら大きな悪を挫くべきだと私は言いました。占いも、肝心なのは、個々人の今日の運勢とかではなく、国家の大きな命運を知ること、本来『易経』の関心はそこにあり、また私の注釈書もその観点からまとめたものでした。

嬉しいことに、私の注釈書を研究した本が、数年前に日本で刊行されています（塘耕次著『蘇東坡の易』、明德出版社（2010年）。本国でも近ごろはあまり関心の持たれない書物を詳しく読んでくれる人が意外にも日本にいたのです。

——へーえ、そうなんだ。だったら、その本の著者にこの店に来てもらって、対談でもしたら？ そこんところの理解はそうではないとか、トバー君が自ら指摘したら、その人もかなりビビったりするかも。

① 900年以上も前の自分の解釈の妥当性をあくまでも主張しようとは私はいりません。大切なのは、『易経』の理解がより深まることです。『易経』はいくら汲んでも汲みつくせない魅力に溢れた古典です。私としては、後世の研究家にむしろ教えを請いたいと思います。さきほどの論争に加わらなかったもう一つの理由がそこにあるのかも知れません。真理に接近して行く、あるいは人間の視界を広げる議論であればいつでも参加したいと思えます。

——こんなボクが聞き手で申し訳ないってさつきいったけど、ボクを相手に話しても、いまいったようなことには少しも役立たないよね。その研究者とだったら、深い話ができ、読む人にとってもきつと有益だよ。ボクは叔父さんから使命

を授かって、ここで聞かせてもらっているんだけど、見当違いのコメントばっかして、なんか恥ずかしいよ。

ⓧ いえ、あなたが聞き手であるからこそいままでこのように話して来られたのです。これが唯一無二のプロセスであって、今後もそれが続いて行くのだと思っています。

あるとき、父が少しばかりの小康状態を得た折に、何気ない会話を一つ二つ交わした後で、

「これからの私はどのように生きて行くのがよろしいのでしょうか」

と、ふと尋ねました。本来なら、父を安心させるようなことを言うべきであったのだけれど、精神的に落ち込んでいて、父の前で自分の弱さを覆い隠す

ことができなかったのです。

父は目玉をぎろりと動かし、

「いまになって何を問うのか」

私は頭を下げ、

「己がいかなる者であるのか、自分でわからず、果たして己を己に任せてよいものなのか、それさえもわからないのです」

「もう20年にもなるうか。そなたのいま問いへの答えは、そなたの名に託した。いま付け加えることは何もない」

父はわずかに笑みを浮かべました。

私は姿勢を改め、

「もう一度しかと心に刻み込むようにいたします」

——名前？ えーと、親というものはいろいろな思いを込めて名前を付けるようだけど、トーバー君の名ってなんだっけ？ 東坡は号とうばだよ。本名は……。

㊦ 車篇に式で、軾しやくです。訓読みをすると「しきみ」です。

軾しやくあるいは軾しきみとは何かといいますが、昔の車の構造を少し説明しなくてはなりません。いま車と言えば自動車を指しますが、昔は人や馬や牛が車を曳いていました。浅草や鎌倉で観光客を乗せて走る人力車を思い浮かべていただくとうろしいでしょうか。人力車には大きな車輪が二つあります。昔の車も同様で、車輪のタイヤに相当するところを輪りんといいます。人力車の車輪の中心とタイヤの部分を結んで何本かのスポークが走っています。昔の車にも同様のものがあって、そ

れを輻かくといいます。人力車の人の乗るところは丈夫な四角い枠で囲まれています  
が、昔の車ではその枠組みの横木の部分を軾じんと言いました。人力車は屋根に当た  
るところに幌を開くようになっていますが、昔の車では蓋がいと言います。

では軾しやくは何かというところ、いまの人力車にはそれに当たるものはありません。遊  
園地でジェットコースターのような乗り物に乗ると、体の前に安全バーが倒され  
ます。それに似た横棒が軾しやくです。昔の車はジェットコースターのように高速で動  
くわけではないので、安全バーが必須ということではなく、車の機能としては、軾  
はあってもなくても構わないようなものでした。だから人力車にはそのようなも  
のはありません。

いまの日本では赤ん坊が生まれると14日以内に名前を決め、出生届けを役所  
に出さないとならない決まりになっていますが、我が父は、私が10歳を過ぎた

ころに、私には軾しやくという名を、弟には轍てつという名を付けて下さいました。轍は訓読みで「わだち」で、意味はそのままで、車輪の通った跡です。昔は土の道でしたから、少し湿っていたりすれば車が通った跡にはつきりとしたわだちが残りしました。

軾も轍も車篇で、兄弟には同じ篇の文字を用いるとか、2字の名のときには1字は同じ文字を用いるとか、何かしら共通するところのある名を付けるのが普通でした。父は私達兄弟の名を決めると、その理由を次のように記しました。

車に具わっている輪りん、輻ふく、蓋がい、軫しんにはそれぞれのきちんとした役割がある。軾しやくはどうなのかというと、それがなくても車は十分にその機能を果たすことができる。そうは言っても、軾を取り除いてしまうと、完全な車であるとは見えなくなる。

我が子、軾よ、そなたは外側をきちんと飾ることを気かけないようだ。だから、無用なようでも完全であるためには必要な軾をもってそなたの名にした。

天下の車は轍わたちを付けないものはなく、道に轍があれば天下の車はそれに準拠して進もうとする。しかしながら、車の性能を言うときに、轍が関わっているとされることはない。その一方で、車が倒れて巻き添えになって馬が死んでも、轍に非難が及ぶことはない。轍と言うものは、福の面では恵まれないけれども、禍わざいの面では及ばないので、ちようと両者の間にいることができる。

我が子、轍てっよ、そなたは跡を残して天下の人がそれに拠るようになるとしても、きっと福からも禍からも免れるに違いない。よって轍をもってそなたの名にした。

——軾って、安全バーなのか。トバー君が、思ったままを口にするなど、つい



つい無謀運転をしてしまうのを、お父さんは早くから見抜いていたってことかな。10歳くらいの我が子を見て、そこまでわかってしまうのって、なんかすごいかも。

でも、せっかく軾の名を付けてもらいながら、トーパー君は安全バーをせずに突っ走って、いろいろと大変なことになったんだよね。

㊦ 不肖の息子であったということなのでしょう。我が名に籠めて下さった父の戒めが守れていたなら、私の人生はかなり違っていたはずです。

——でも、そうだったら、あんましおもしろくなくて、ここで話してくれるようなネタもないってことになっていたんじゃないのかなあ？ 奥さんが、やんちゃ

って言ったのも、安全バーなしってことだったりしそうだね。

㊦ 弟の方は轍てつの名にぴったり合っていました。レールを踏み外さず、世の規範となるべき跡を残したと思います。しかし、この兄がいたために、本来なら車わだちがひっくり返っても影響が及ばないはずの轍わだちまでもが禍を免れなかったのは、弟に対して申し訳ないことでした。

へわかあっちゃいるんだ弟よ

いつかお前が喜ぶような 偉い兄貴になりたくて

奮闘努力の甲斐もなく 今日も涙の

今日も涙の陽が落ちる 陽が落ちる

——また、歌って……。不肖の兄だとフーテンの寅さんを気取っても、トーパー君は頭がよすぎるからゼンゼン似合わないよ。頭がよすぎてアホだつていうのはあるのかもしれないけどさ。

㊦ あなたは新井白石をあらいはくせきご存知ですか。

——いきなりなんの質問？ 頭がよすぎてアホなんていったから、ボクの知識レベルを試そうつていうの？

新井白石といえば正徳しょうとくの治ち。これは高校生の7割が答えられましたっていうよ  
うな問題かな。ボクは一応は文系なんで、日本史もやったから、まだそれくらい

は記憶に残ってんよ。それがどうかした？

㊦ では、新井白石の主要著作には何がありますか。

——まだクイズを続けるの？ いいよ、いいよ、答えられますよ。『西洋紀聞』『折せたく柴しばの記き』、それに『読史余論どくしよろん』……。ボクってすごくない？ 三つもスラスラ出てきたんだから。受験勉強以来一度も使ったことのない知識がちやんとまだ残ってたっていうのは、自分でも驚きだけど。

㊦ それらのどれかをお読みになりました？

——叔父さんの本棚にはどれかあったような気がするけど、手に取ったこともないなあ。文系のくせして漢文がきらいっていうのはかなり問題だったけど、古文は最近の内閣支持率並みの30パーセント程度の関心だったかも。

㊦ 新井白石は私が強い関心を抱く日本人の一人です。私より621年も遅れて生まれているので、時間的な距離で言うとなあなたの方にはずっと近いのですが、文化的な距離では私の方にはずっと近いと言わなければなりません。

新井白石は儒学を修め、歴史に強い関心があり、漢詩を作り、将軍の近くに仕えて幕政の改革を行い、後に失脚しました。と言うと、私とかなり共通するものがあると感じますでしょう。

——まあそうだね。ボクには一つも共通性がないよ。

① 新井白石の著作は儒学的教養をベースにしているところから、私には馴染みやすいものがあり、とくに『折たく柴の記』を読んで私は非常に感心し、またうらやましくも思いました。

『折たく柴の記』はご存知の通り自伝的な著作で、いわば私がここで語っているように、子孫に向けて自分のしたことをありのままに書き残したものです。自伝を記すというのはそのころまでの中国においても日本においてもかなり珍しく、しかも自分を正当化するような姿勢がなくて、事実を淡々と記しているのが特に感心させられます。そして、うらやましく思ったのは、新井白石が自身の父親について、様々なエピソードを克明に記していることです。

叔父さんの本棚からは是非引っぱり出して読んでいただきたいと思いますが、一点だけ短くお話すると、新井白石は父から教わったことはたくさんあるけれども、常に思い出すのは次のことだと記しています。

「男児はただ事に堪えることを習うべきだ。これを習うには、何事であっても、自分でこれは極めて堪え難いと思うことから我慢することを始めたならば、それを久しくするうちに、それほど耐えるのが難いと思えることはなくなってしまうものだ」

——ふーん。ちよつとばつかしわかるかも。

介護の仕事って慢性的な人手不足なんで、うちの職場でも一時期職員がゼンゼ

ン足りないことがあって、こんなの絶対にムリっていう状態にまでなって、メチヤクチャだったんだけど、それをなんとか乗り越えたら、なんか仕事がラクに感じられるくらいになったんだ。人間って、慣れるのってすごいよね。慣れたくなんかないのに、慣らされちゃっただけなんだけども。

㊦ 新井白石は、8歳か9歳のころから、この教えを胸に抱いて忍耐を身に付けようとしてましたけれど、もともと短気に生まれついたために、怒りに堪えられないことがあったと、正直に記しています。

つまり、新井白石の父も私の父と同じように、我が子の性格を早くから見抜いていたのです。

不思議に思われるかも知れませんが、中国に妻の死を悼む詩の伝統はあっても、



父の死を悼む詩を見つけることはまずできません。父の死はいわば天地が崩れるような出来事で、言葉も何も及ばないのであって、詩でも作ろうものなら、悲しみが足りない、軽薄であるとの批判は免れなかったでしょう。父が亡くなったら、足掛け3年の喪に服し、ひたすら悲嘆にくれるということではなければならなかったのです。

己の父の事績は、新井白石のように自分で記すのではなく、資料を揃えて筆の立つ人に託し、一定の形式に合わせてまとめてもらうのが普通でした。公の場での事績が記述の中心となり、家族内の些末な出来事などは普通は記されません。遺族の依頼を受けて第三者が書くので、えてして故人を美化するということになりがちで、『折たく柴の記』のような活き活きとした描写は期待できません。

——えーと、思い出したけど、スーパースターの富弼の伝記を書いたり、パウハラ知事の伝記を書いたり、トーバー君もしたんだよね。それもやっぱ故人を美化したの？

① 答え難い質問です。その人らしさが最も際立つように書いたと言っておきたいと思います。

——トーバー君のお父さんについても自分では書かなくて、だれかに書いてもらったんだよね。新井白石のように自分で書いていたら、もっといろいろたくさん盛り込めたはずなのでうらやましく思ったんだ。

それで、だれに書いてもらったのかということをもたまたまクイズにする気だったら、

先に答えちゃうね。筆の立つ人で、お父さんと深い関係があるといったら、薬を贈ってくれたっていう人以外にいないもの。

㊦ その通りです。欧陽脩は父の最大の理解者で、一番の恩人でありました。父について書いていただくのにこれ以上の人はおらず、欧陽脩もまた自分以外に書く者はいないということ、すぐに引き受けて下さいました。

父が亡くなったのは治平3（1066）年4月25日で、58歳でした。そして翌年の10月27日に故郷の墓地に葬り、その墓の傍らに建てた碑に刻んだ墓誌銘を欧陽脩が書いて下さいました。その大略は以下の通りです。

蜀しよくに一人の君子がいて、蘇君そと言った。蘇君の諱いみなは洵じゆん、字あざなは明允めいいん、眉州眉山の

人である。

蘇君は義を行い、一家をきちんと修め、郷里の人々に信望があり、広く蜀において知られることとなった。

私おうようしゅう歐陽修は、蘇君が二人の息子、蘇軾そしやくと蘇轍そてつを連れて上京した際に、蘇君が書き著した文章二十二篇を得て、朝廷の人々に配った。皆は争うようにしてそれを次々に別の人に読ませようとした。二人の息子は進士に及第し、しかも成績は上位だった。二人の息子の文章もまた世に称賛されることとなった。

眉山は都から西南に数千里の彼方にあり、蘇君父子の名はその地に隠れていたのが、一日にして都の人々に知られるところとなり、父子三人の文章はついには天下を席卷するに至った。

蘇君の文章は広い知識に裏打ちされ、力強く、普遍性があり、読む者はぞくっと

恐ろしいばかりに感じて、これは一体どのような人が書いたのだろうかと想像せずにはいられなくなる。ところが、実際に蘇君を見ると、あまりぱつとせず、とても鋭いことを言いそうにない。話をしてみても、一緒にしばらくいると、次第に敬愛すべき人だと思えて来て、ふともらす言葉にはつと感ずるところがあり、ならばと問うと、尋ねれば尋ねるだけ無限に答えが返って来るようになるのである。ああ、この蘇君こそは純明篤実じゆんめいとくじつの君子と言いうべきである。

蘇君の曾祖父を蘇祐そゆうと言いい、祖父を蘇杲そこうと言いい、父を蘇序そじょと言いう。三代にわたつて世に顕れることはなかった。蘇序に三人の息子があり、蘇澹そたん、蘇渙そかん、蘇洵そじゆんと言いい、蘇渙は進士に及第した。

蘇君は勉学を好まず、壮年に至つても書物を手に取ることがなかった。父はそのような蘇君を自由にさせていたので、郷里の親族は訝しく思い、どうして放置し

ておくのかと、ある人が尋ねた。父は笑って答えなかった。蘇君もまた気にすることがなかった。

蘇君は二十七歳になると、突如として発奮し、それまで付き合っていた連中と交わりを断ち、家に籠って書物を読み、文章を書く練習を始めた。歳月を積んで科挙に挑み、二度落第した。制科にも挑んで失敗し、故郷に帰って、こう言っていた。

「受験のための勉強は学ぶに値しない」

それまで書きためた数百篇の文章を全て燃やし、門を完全に閉ざして書物を読み耽り、数年の間は筆を持たず、文章を作ることはなかった。儒学の経典、諸子百家の著作等々を大いに究め、古今の治乱成敗は何によるのか、聖賢の窮達出処の機微はどこにあるのかを考え抜き、その本質を把握し、溢れるほどに知識を蓄え

ても、なおそれを抑えて、内より外に出すことはなかった。

長い時間を経て、あるとき、

「もうよかろう」

そのような思いがふとよぎると、筆を手に持ち、たちまちにして数千字の文章が生まれた。書けば書くほど、縦にも横にも、上にも下にも自由自在に動きまわって、出ては入り、速く駈け、遠く駈け、必ず深くまた細微なところに至って初めて止まるのだった。

思うに蘇君の才能は豊かで、その発露が遅かったのは慎ましやかであったからで、ひとたび時機を得て真髓を掴み取ったのである。

蘇君が都に来ると、人々は一斉にその賢を尊び、その文章を規範とした。父子三人が揃って名を知られたことから、特に「老蘇<sup>ろうそ</sup>」と呼ばれるようになった。

始めに私は蘇君の文章を皇帝に差し出し、紫微閣しびかくの一員に招こうとしたのだが、蘇君は辞退した。そこで秘書省校書郎の職を用意した。たまたま宋朝が始まって以来の礼に関する書物を編集する作業が始まっていたことから、蘇君は霸州文安は県主簿という名目上の職に就いた上で、その編集作業に従事し、『太常因革礼』たいじょういんかくれい一百卷を完成させた。ところがその書を皇帝に差し出して労が報われる前に、蘇君は亡くなってしまった。没したのは治平三年四月戊甲つちのえきのえ、享年五十八であった。皇帝はそれを聞かれると哀れみ、光祿寺丞こうろくじじょうの名誉職を贈り、公費で船を用意させ、その棺を載せて蜀の地に葬るように命じた。

蘇君は程文応ていぶんおうの娘を娶り、三人の男児おとこが生まれた。長男の景先けいせんは早くに亡くなり、次男は軾しつ、三男は轍てつである。三人の女兒むすめが生まれたが皆早くに死んだ。孫は邁まいと遅ちがいる。文集二十卷と『諡法』しほう三卷がある。



蘇君は人とよく交わり、人の危難をよく救い、ある人が死んで孤児が残ったときには憐れんで養ったので、村の人々は蘇君には徳があると称えた。

蘇君は最後に『易経』えききょうを好み、

「『易経』は深遠な書物で明らかになっていないところが多くあり、これまで学者は牽強付会の説を出して混乱させるばかりであったので、それを取り除くことで聖人の本来の主旨が明らかになる」

と言って、『易伝』えきでんという著作に取り組み、しかしまだ完成に至らなかつた。

治平四年十月壬申、蘇君は彭山の安鎮郷可竜里みずのえさる あんちんきょう かりゅうりに葬られた。

蘇君は遠い田舎に生まれ、学問が成るのが遅く、常に嘆いていた。

「私を知る者は、ただ吾が父と、歐陽公だけだ」

だから私以外に墓誌銘を書く者はいないのだ。

その銘に曰く、

蘇氏の先祖は唐の世に顕れた。それは樂城らんじょうの人で、官の仕事で眉州に来てそこに留まり、子孫が繁栄して、曾祖父のころから郷里においてその仁徳が称賛されるようになった。偉大にして明らかかな蘇氏の才は蘇君に至ってその文章において大いに発揮された。蘇君には文章があり、さらにその子があった。朽ちることのないものを遺し、その子孫はいよいよ盛んになるだろう。ああ、君の字は明允あきひこ、その通りに明らかにして亡びることはないと言うべきである。

——なるほどねえ。素直に感心するのがいいと思うんだけど、ひねくれて言うと、聞いている印象は、美化しがちっていつてた通りじゃないのかなあって感じかな。

トバー君のお父さんのことだから、ほめられて当然、書いてある通りであった

のかも知れないけど、なんかベタぼめで、かえってウソじゃない？って、疑いたくもなる。遺族に頼まれたら、喜ばれるように書くしかないだろうし……。

えーと、根性悪の言い草はそれくらいにして、唐の時代に有名な先祖がいたっていうのは、だれなの？

㊦ いまの日本ではまず知らないという程度の人です。蘇味道そみどうと言います。中国

でただ1人の女性の皇帝であった則天武后そくてんぶこうのもとで宰相になり、詩人としてもそこそこ知られた人です。

日本でもうちの遠い先祖は清和源氏せいわげんじとか言いたがるように、過去の有名人と自分の家系を結び付けようとするのはよくあることでした。蘇味道は則天武後の政権が倒れた後で眉州に流され、私達がその子孫である可能性は小さくはないと思

っています。

ご指摘の通り褒め過ぎの感はあるけれども、歐陽脩が父の文章について、

尋ねれば尋ねるだけ無限に答えが返って来る

(愈いよいよ叩いよけば愈いよいよ無窮)。

という評は、その特質をよく表わしていると思います。父が目指したのがまさしくそれで、本質を把握するならば、そこからは無限に湧いて出て来るものがあるのです。

——あのですね、お父さんについてはこのような文章が残されたわけだけど、一

方で、奥さんについては何もなかったの？ 詩は詠まなかったってさつきいってたけど、どんな人だったのか、文章とかなんにもなかったの？ 女の人ってさびしいね。

㊦ いえ、妻については、私が自分で墓誌銘を書きました。父に比べたらずっと短いものですけれど。

治平二年（1065）五月二十八日、趙郡ちゆうの蘇軾そくの妻王氏おうは都で死去した。その七日後、都の西で仮に棺に納めた。翌年の六月、眉州の東北の彭山ほうざん県安鎮郷あんちんきやうの可竜里かりゆうりにある母の墓所の西北八歩のところに埋葬し、私蘇軾が墓誌銘を記した。

君の諱いみなは弗ふつ。眉州の青神せいしんの人で、郷試に合格した王方おうほうの娘として生まれ、十六歳

で軾のもとに嫁いで来た。子は邁まいがいる。

君は嫁す前には、君の父母に仕え、嫁してからは我が父と母に仕えた。いずれのときも謹きんしゆく肅との評判を得た。

嫁したその初めは、書物を知るとは自分からはひと言も言わなかつた。軾が書物を読むとき、君はずっとそばにいて、音読するのを聞いていた。理解しているかどうかはわからなかつた。その後、軾に忘れたところがあると、君はすぐに思い出させてくれた。他の書物について尋ねてみると、どれもおよそのことを知っていた。それで君が賢く慎ましやかであると知った。

軾が官職を得たのに伴って鳳翔に来てからは、軾が外で為すことを、君は問うこともないのに詳らかに知っていた。

君はこう言った。

「あなた様はいまお父様から遠く離れています。よくよく慎まなければなりません」

君は、我が父が私を戒めた言葉を日々に語ってくれた。

軾が客と外で話すのを、君は壁の向こうで聞いていて、客が帰ると客とのやりとりを再現してこう言った。

「あの人はいつもどっちつかずのことしか言いません。あなた様がどう思っているかを見て、それに合わせようとしているだけです。そのような人の言うことは聞くに値しません」

あるいは、軾と一生懸命に親しくなろうとしている人がいると、君はこう言った。

「あの人はきつと長くは続かないでしょう。すぐに意気投合するような人は、離れるのもきつと速いのです」

いつも君の言った通りになった。

君が亡くなるまでの一年の間、思えば耳を傾けるべきことがたくさんあった。見識豊かな人と同じであったのだ。

君が死去したのはまだわずかに二十七歳であった。君が死去すると我が父はすぐに軾に次のように命じた。

「君の妻が君の艱難に従ったことを忘れてはならない。いつか必ず君の母の近くに埋葬するのだ」

それから一年で我が父は亡くなり、軾は謹んで我が父の遺令に従って君を葬った。

君はこの墓地で我が母にまみゆることとなった。私は我が母に会うことはできない。ああ、哀しいことである。私は永く母に仕えることができずにいる。

君は死んだとはいえ、我が妻としての勤めを為すことができる。だから傷ま



ずともよいのか。ああ、哀しいことではないか。

——うーん、なんかケチをつけるばかりで悪いんだけど、正直な感想としては、途中まではよかったんだけど、最後の部分がどうなのかなって感じがした。

一般的に言って、姑と嫁って微妙な関係だったりするよね。トバー君の奥さんの場合に実態がどうだったのかっていうのはわからないけど、死んでからも姑さんに奉仕しなければならないっていうのは、うれしくなかったりしないのかなあ。

でも、考えてみたら、本当に死後の世界でそのようにすることがあるわけではないのだから、舅、姑にきちんと仕えるべきであるという価値基準が強烈だった時代に、理想の嫁としてそのようであったと言うのが、妻に贈る最大の賛辞とい

うことだったりするんだろうね。生死を別にして、自分はいまは母に仕えることができないので、代わりにやってくれる妻がうらやましいというのが、妻への一つの愛情表現であり、母への愛だと、一応は理解できるけど。

ボクって、読みが深いと思わない？

㊦ そのように読んで下さると有難いです。

文中で、「賢く慎ましやかであつた」と書きましたけれど、原文では、

敏而静也（敏びんにして静せいなり）


です。要約すれば、この2文字が妻の人となりを表わすのに最も適していると思

います。この文字を口にする、いまもありありと妻のことを思い出せます。

この表現は、先に紹介した梅堯臣の詩で、自分の奥さんを「美しくて賢い」と詠んだのを意識したと思っただけでもよろしいかも知れません。

——やっぱ、ちゃんと奥さんに愛情を注いでいたんだよね。でも、気付くのがちよつと遅かったってことかな。本に書いてあることはよく理解できても、実際の身の回りのことは案外と見えていなかったりするのかも。さつきもいったけど、頭がよすぎて……ってやつかな。

㊦ 頭がいいかどうかは別として、交友関係について妻から指摘を受けたように、見えていて当然のことが見えていないということが、時折私にはあるようです。

乳母の任採蓮じんさいれんに対してもそうでした。採蓮が我が母ともに蘇の家に来たことは前にお話したと思います（第2回）。妻がいなくなつて、私の身の回りのことや息子のことは、採蓮が全てみてくれるようになりました。採蓮はいそいそと仕事に励み、急に若返つたかのように見えました。

採蓮が妙に張り切っている感じがし、最初は違和感があつたのですが、私は自分が反省しなければならぬと気付きました。家の中のことは妻に全てを任せていました。うるさく口を出さぬというものはそれでよしとしても、採蓮のことだけは私が考えておくべきでした。採蓮はあまりやるべきこともなく、かといつて蘇の家を出て帰るところはなく、このままいたずらに老いて行くだけかと、恐らくは身の置き所に困っていたのでしよう。

「最も辛いのは息子だろうから、私のことはともかく、息子のことは重々そなた

に頼みたい」

と、私は採蓮に言いました。それを聞いた瞬間に採蓮の顔が輝いたのを見て、私はこの乳母をもっともっと大切にしなければならぬと思つたのでした。

そして、父が亡くなると、私にはすでに両親はなく、伯父も先に亡くなつていて、身近な年長者は採蓮だけということになりました。採蓮がさらに貴重な存在となつたのでした。

もつと貴重な身内が弟でした。父が亡くなつてすぐに弟は赴任先から都に戻り、弔問客の応対をしたり、郷里の眉州に帰るための段取りを整えたりと、様々なことをしてくれました。私は精神的にあまりいい状態ではなかつたために、弟に頼り切りでした。

もうひとり馬正卿がいました。本来馬正卿自身も科挙を目指していたわけです

から、私のもとで召使のようにしていつまでも働いていい人物ではないのです。私が官職を離れて郷里に帰るに際して、馬正卿には別の道を歩んでもらうというのが正しい選択としてあったのだと思います。しかし、そのとき私は馬正卿を必要としていて、馬正卿が何も言い出さないのをいいことに、細々としたことをたくさんしてもらいつつ、自ずと郷里へと向かう船に同乗してもらおうということになったのでした。

——トバー君は支えてくれる人達を必要としていたんだらうね。馬正卿さんも乳母さんも、トバー君のためというのが結構いい張り合いになっていたりしたんじゃないのかなあ。

ボクは介護の仕事をしているわけだけど、介護の「介」の字は、「人」を下から

2本の腕で支えているということを表わしていて、それが介護の仕事の意味なんだって、だれかがいつていた。漢字の意味としてそれがホントなのかどうかは知らないけど、下から支えるその「人」っていうのが上にないと、ボクらの仕事はないんだよ。つまり、支えられる人がいてこそその支える人だってことで、馬正卿さんや乳母さんの気持ちがいまのボクにはちよっぴりわかるかも。

㊦ 私にはそういうところが欠けていたのだと思います。

父と妻の二つの棺を載せた船が、都の船着き場から離れたとき、見送ってくれる人々の目礼しつつ、自分がまたここに戻って来て、あの人達の中に交わるようになるとの感覚は全くありませんでした。

父の喪は足掛け3年です。それが明けたら再び官職に就くのが当たり前で、普

通にはそれ以外のことは考えられません。

そのとき私の心はすでに遙か西に飛んでいました。私の本性は鹿です。その本性のままでは官界では生きられません。ずっと抑え付けられていた鹿が、郷里の野山を駆け巡ろうと、私の身に先んじて飛んで行ったのです。

父に連れられて初めて都に来たのは21歳の夏、そして31歳の夏に二つの棺を載せて眉州に向かおうとしていました。10年の間に私は何をしたのでしょうか。

科挙を受けたとき、父のためにとの思いが強くあったということはお話したと思います。私は父が拓いてくれた道をずっと歩んで来ました。父は世に認められるまでに時間はかかりましたけれど、その人生を全うしたと言っていていいでしょう。父が亡くなって、自分はどのような道を歩んで行くべきなのか、私には全く見えていませんでした。



私は8歳でスーパースターに憧れ、特に范仲淹を手本に仰ぎ、3度目の試験にも合格して、皇帝の近くで働くようになりました。故郷に帰る船は特別に皇帝が用意して下さいました。このような私に、これからも国ために尽くす以外に何があると言うのでしょうか。

私の心はすでに故郷に飛び、船に残された抜け殻の身は、官職に就いたことを悔いていました。妻の死は、我が姉が虐待されたのと変わるところがありません。

官職に就いていなければ、妻のことをもつと顧みることができて、天寿を全うできたのではないのでしょうか。もしも、私が我が本性のままに生きようとしていたならば、妻を娶うことはなく、不幸な妻の死はそもそもあり得ないことでした。

官界への失望感もありました。野の鹿は野性を覆い隠さなければ官界に入れません。隠し続けるうちに、野性は消え、いつしか自分が鹿であったことさえも忘

れてしまうのです。そうなったら、鹿は何のために生きているのでしょうか。

——うーん、かなり難しい問題だね。でも、結果としては、政治の世界にまたもどったってことだよ。だって、そうでなかったら話が終わってしまうもの。

Ⓣ 次回は郷里に帰ってどのようなことを考えたのかということをお話したい  
と思います。

——いよいよ今夜も終わるか。重い感じの話だったけど、話してくれたトーパー君のほうが大変だったのかも。

㊦ では、最後に、私にも妻の死を悼んだ作品があったということを知っていただきましようか。あなたは、メアリーと別れて9年の歳月が経ったというジョン・クレアの詩を最初に聞かせて下さいました。私の場合は妻の死から10年後でした。次のような詞です。

生きる者も死する者も、

遙かに遠い十年の歳月、

ぼんやりとさせてしまいます。

ずっと抱いていたわけではない思い、

でも、忘れていたのではありませんでした。

千里の彼方の丘にぼつねんとある墓、

いま胸にあるものをどのように話したらいいのでしょうか。

たとえ君に会えたとしても、

「えっ、あなたは誰なの？」

そう、僕の顔に満ちるのは人生の塵、

鬢はすでに真白なのです。

夕べのあれは夢？

ふと私は故郷に帰っていました。

小さな部屋の窓辺、

君はちょうど化粧をしていました。

振り返って、ただ無言、

ぼろぼろと涙を落したのでした。

もうわかりました、

これからは、毎年、夢で心を痛めるのです、

昨夜と同じように月の下、

十年目の松がまばらに生える、

君の眠るかの丘で。

——なんか今夜はケチばかりつけてきたみたいだけど、こればかりは……

\*

\*

\*

イノ君が言葉を詰まらせたところで、録音は終わった。次に言う言葉が見つからなかったのか、それとも、言う前にあえて切ったのか。

恐らくは、イノ君らしからぬことを言おうとして、電源をオフにしたのだろう。それについてイノ君に問うことはなく、私もイノ君に習い、イノ君が新井白石の本をまだ読もうとしていないということ以外に書き足すことなしに、この第10回を終えらるでしょう。